『正像末法和讃』の一写本

――林松院文庫本の影印紹介――

小山正文

一、親鸞作和讃の特色

「大無量寿経真実之教浄土真宗」[1]を開顕した親鸞（一一七三～一二六二）には、周知のように『顕浄土真実教行証文類』（『教行信証』）をはじめとする二〇部前後の著作が残っている。[2]それらの中でも注意をひくのは、和語でもって経・論・釈の内容や仏・菩薩・高僧・太子などの徳行を一定の字句数に整え讃嘆した和讃である。親鸞の場合その和讃が実に五部五〇〇首以上もあって、和讃史上質量ともにきわめて重要な位置を占めるものとなっている。[3]

親鸞作のその五部というのは㈠『浄土和讃』、㈡『浄土高僧和讃』、㈢『正像末法和讃』、㈣『皇太子聖徳奉讃』、㈤『大日本国粟散王聖徳太子奉讃』で（以下各和讃名はこの番号で示す）、これらのうち㈠・㈡・㈢を総称して、真宗では『三帖和讃』と呼ぶが、それではこうした親鸞の和讃には、どのような特色がみられるのであろうか。その辺のところを箇条書にしてまとめてみると、およそ以下のようになろうかとおもうが、断っておかなければならない

のは、門外漢のため教学面のことは、ここで一切触れていない点を予め了承願いたい。

(1) 親鸞の和讃はその成立年月日が、㈠㈡が宝治二（一二四八）年一月二一日、㈢が正嘉元（一二五七）年閏三月一日、㈣が建長七（一二五五）年一一月三〇日、㈤が康元二（一二五七）年二月三十日という風にはっきりしている。

(2) 基本的に親鸞の和讃は四行をもって一首を形成し、美濃判（縦二七・九×横一九・七㎝）の紙面一杯に書されるため大変みやすい。

(3) 初行はあとの三行よりも二文字近く上っていて、その右肩に首数番号が記入される。

(4) 使用文字はすべて漢字・片仮名である。

(5) 漢字には振仮名が付され、かつ圏発点も朱筆で打つため、きわめて読みやすい。

(6) 漢字の多くに左訓が施され、意味がとりやすくなっている。

(7) 親鸞の和讃は何らかの出典を有するのが、大きな特色のひとつとなっているが、ややもすればそれの字句にとらわれすぎて、和讃としての雅やかさに欠ける面がないではない。

(8) またそうしたことから典拠に明るくないと、和讃の内容を十分理解しがたい点もなきにしもあらずといえる。

(9) 各首最後の四行目が、命令形や断定形で結ばれる場合が多いために、聞いていて歯切れはよいものの優美さ優雅さに乏しいところがある。

(10) 同じ和讃でも写本によって字句や順序、首数などに相違がみられるのも注意点で、これは親鸞がその都度手

を入れ増補改訂した結果を示すものにほかならない。

(11) 親鸞の和讃には、作者親鸞の自筆本をはじめ直門侶真仏（一二〇九～五八）、顕智（一二二六～一三一〇）、慶信や親鸞の子孫に当る本願寺の覚如（一二七〇～一三五一）、存如（一三五六～一四五七）、蓮如（一四一五～九九）、また真仏・顕智の流れを汲む専修寺の真慧（一四三四～一五一二）、堯恵（一五二七～一六〇九）などによる鎌倉時代から室町時代にかけての貴重な古写本が、すくなからず存することも大きな特色である。[4]

(12) 親鸞生誕三〇〇年に当る文明五（一四七三）年三月、蓮如は『教行信証』所収の『正信偈』ならびに『三帖和讃』を開板し、[5] 両者を僧俗一体となって唱和諷誦する風を確立するが、これが現今に至るまで真宗門徒独特の麗しい宗風となっていることも忘れるべきではない。

二、親鸞の和讃年譜

さて、上のような諸特色を有する親鸞の和讃において、稿者が注視したい事実は、親鸞が同じ和讃を一再ならず書写し、そのたびに重訂を施しているという(10)のことである。いまその親鸞の和讃における増補改訂されていく書写の跡をたどってみると次のようになる。

宝治二（一二四八）年　戊申　親鸞七六歳

一月二一日、㊀一〇八首、㊁一一七首の都合二二五首を作す。ただし宝治二年の親鸞自筆原本は現存せず、三重・専修寺蔵真仏書写国宝本㊀・㊁の「已上弥陀一百八首　釈親鸞作」「已上高僧和讃一百十七首／弥陀和讃高僧和讃都合／二百二十五首」「宝治第二代(ママ)申歳初月／下旬第一日釈親鸞六十歳／書之畢／見写人者必可唱南无／阿弥陀仏」なる奥書より、[6]㊀・㊁の成立年代および首数が判明し、㊀が最初「弥陀和讃」と称されたこともわかる。

建長六（一二五四）年　甲寅　親鸞八二歳

一二月㊁をなす。この和讃のことは蓮如の孫に当る顕誓（一四九九～一五七〇）が、永禄一〇～一二（一五六七～六九）年の間に著わした『反故裏書』（『反古裏』とも）にも「即浄土和讃御奥書御筆ニ建長六歳甲寅十二月日トコレアリ」とみえているが、[8]京都・大谷大学図書館博物館蔵や三重・専修寺蔵の江戸時代前期刊本の㊀にこの年月をみる以外、[9]写本などの存在は知られていない。刊本の内容は蓮如の文明版㊁と異ならず、したがって首数も宝治二年本にくらべ巻頭に別和讃が二首、巻尾に「大勢至菩薩和讃」八首が加わった一一八首となっている。ただし江戸時代の刊本が、どこまで建長六年本の姿を伝えているのか、文明版と全同するだけに疑問な面もある。刊本の奥書は次のようになっている。「御真筆本奥書曰／建長六年甲寅十二月／日／拠レ此ニ当帖聖人八十二歳ノ製作也[10]」。

建長七（一二五五）年　乙卯　親鸞八三歳

四月二六日、㊁の三度目書写を行なう。親鸞の原本は現存しないが、直門侶顕智六五歳が正応三（一二九〇）年九月一六日に書写したものが、三重・専修寺に伝わっていて重文の指定を受ける。[11]顕智本によると首数は、宝治二年本より九首増えて一一七首となっているほか、巻頭に三首、巻尾に五首の別和讃計八首を付す。この別和讃八首

は、巻尾の第一首目を除く七首までもが、じきすぐあとに成立してくる㈢に出てくるものばかりであるところより、㈢の萌芽がすでにこの時から始まっていたとみてよいであろう。

なお、別和讃のうち巻尾の終り二首「无明法性コトナレト」と「罪業モトヨリ所有ナシ」は、永久四（一一一六）年の書写になる『高山寺本古和讃集』所収『普賢讃』・『本覚心要讃』・『守護天台讃』にすでにみえるもので[12]、厳正にいえば親鸞の作品ではなく天台系の和讃であることに注意したい。顕智書写の建長七年本㈠の奥書は、次のごとくである[13]。「建長七年乙卯四月廿六日写之（草本云）／正応三季庚寅九月十六日令書写之ヒ」。

五月二七日、右の㈠に続き㈡も二度目の書写をした可能性がある。これについては三重・専修寺蔵の延慶二（一三〇九）年顕智八四歳編写『聞書』末尾の別筆挿入紙に書かれている奥書「草本云／建長七歳乙卯五月廿七日／愚禿親鸞八十三歳／書写之」が[14]、㈠に続く㈡のものと判断し、しばらくここに入れておくこととする。なお顕智には㈠㈡㈢を正応三年九月に同時書写した形跡のある点も考慮しておいてよかろう[15]。

一一月三〇日、㈣七五首を成し、「拝見奉讃ノ人者（ハイケンホウサンヒトハ）／南无阿弥陀仏／可唱丶丶／建長七歳乙卯十一月晦日書之／愚禿親鸞八十三歳」の奥書を加える。奥書は現存最古本の三重・専修寺蔵真仏筆写重文本にもとずく[16]。後述のごとく諸所に散在する親鸞真蹟㈣の断簡は[17]、この建長七年本のものでないことに注意する必要がある[18]。ちなみに㈣に引き続き親鸞は、一一四首本㈤もあわせて作したとも考えられている。

康元元（一二五六）年　丙辰　親鸞八四歳

一一月二九日、親鸞は「浄土和讃・大无量寿経言・无量寿如来会言・業報差別経言・大集経言・涅槃経言・往相

回向還相回向文類」の七項目よりなる撰述書を法然房源空門下時代以来の法友善蓮に授与したことが、愛知・上宮寺蔵鎌倉時代末期写本、同・浄蓮寺蔵正徳三（一七一三）年三月恵空七〇歳透写本、京都・大谷大学図書館博物館蔵明治四三（一九一〇）年九月山田文昭三四歳影写本の各『浄土和讃』の「南无阿弥陀仏／康元元丙辰十一月廿九日／愚禿親鸞八十四歳書之」なる奥書より知られる。[19] これに所収の一三首は㊀と同名異本で、後掲する正嘉元（一二五七）年親鸞八五歳の㊂にみられるものばかりとなっている。[20] したがってこれは、㊂成立の前段階的な性質の和讃と位置付けられるべきものであろう。なお本書の原本は江戸時代初期に坊官下間頼廉（一五三七～一六二六）が、西本願寺点退の節所持しのち解綴されたために現在は断簡となって散在する。うち和讃は一三首中、第二・八・九・一二首目の四首が伝わるが、いずれも親鸞の真筆ではなくて直弟の筆になるものとみられる。[21]

康元二（一二五七）年　丁巳　親鸞八五歳

二月九日の夜寅の時（午前四時頃）、「弥陀ノ本願信スヘシ　本願信スルヒトハミナ　摂取不捨ノ利益ニテ　无上覚オハサトルナリ」の夢告和讃を被る。この和讃はのちに㊂に所収されるが、これの授与者は聖徳太子とも親鸞の恩師法然房源空かともいわれる。[22] 授与日の二月九日は、建永二（一二〇七）年のいわゆる承元の法難で、死罪となった親鸞の法友住蓮、安楽の祥月命日であり、[23] また夢告讃一年前の同月日時には、聖徳太子が親鸞を阿弥陀如来の化現として四句の偈文を唱えつつ敬礼する夢を、親鸞常随昵近の門侶蓮位がみた日時ともまったく同じであるのも注視される。[24] 実はこの蓮位夢想とすぐあとで触れる一一五首本㊄の存在より、夢告讃の授与者を太子とする根拠にもなっているのである。

二月三〇日、再治本㊄一一五首をなす。[25]㊄の初稿本はすでに言及しておいたごとく建長七年初稿本㊃と同時作であったかも知れない。[26]㊄には覚如や蓮如の写本もかつては存在したが、[27]愛知・満性寺蔵の天文一八（一五四九）年同寺住職寂玄書写本、同じく天正三（一五七五）年寂如書写本が現存最古写本で、[28]他の四和讃のごとく古写本に恵まれない。親鸞は㊄を再治した際、㊃もあわせて再治書写してこれを直門侶覚信に授与した㊃の親鸞真蹟断簡が、二五～六点確認されている。[29]㊃の初稿本系真仏書写本と再治本系覚信授与本〔覚信授与本の全文は残らないが、その系統の内容を知ることができる恵空（一六四四～一七二一）写伝本が、京都・大谷大学図書館博物館に蔵されている〕との大きな相違点は、前者の第四七首目と第四八首目が、後者の第六七首目と第六八首目に、また逆に前者の第六七首目と第六八首目が、後者の第四七首目と第四八首目にそれぞれ入れ替わっていることと、再治本には初稿本にない廟崛偈文一六句と涅槃経文八句が付加されているという大きな違いがみられて注目される。[30]

正嘉元（一二五七）年　丁巳　親鸞八五歳

閏三月一日、はじめ九首親鸞自筆、残り三二首真仏四九歳筆とみられている三重・専修寺蔵国宝本の草稿本㊂が成立し、これを覚然が伝持する。[31]覚然の名は『親鸞上人門弟等交名』には出てこないけれども、三重・専修寺蔵の康元二（一二五七）年一月二七日親鸞八五歳筆の『唯信鈔』・『唯信鈔文意』の表紙袖書にもその名がみえ、[32]同寺蔵の正元元（一二五九）年閏一〇月二九日付親鸞八七歳筆高田入道宛消息でも登場する。[33]親鸞面授の高田門徒の有力な一員であったのだろうとおもわれる。

正嘉二（一二五八）年　戊午　親鸞八六歳

三月八日、親鸞第一の高弟で高田門徒祖の真仏が、齢五〇歳で入滅する。[34] これよりさき真仏は三重・専修寺蔵の㊀・㊁・㊂・㊃を師親鸞指示のもとに書写し、親鸞作和讃本の最古最善本を世に遺し伝えることに次代の顕智と同様大きく貢献した。

九月二四日、㊂を再治する。三重・専修寺蔵正応三（一二九〇）年九月二五日顕智六二歳書写の次の奥書が、その事実を物語る。[35]「草本云正嘉二歳九月廿四日／親鸞八十六歳／正応三年庚寅九月廿五日令書写之已了」。この再治本は前年の草稿本より首数も四一首から九二首に増加し、内容も本願寺蓮如が開板して広く流布した文明版㊂より、むしろよく整っている感さえ与える完成度の高いものとなっている。なお顕智には正応三年九月一六日に㊀を、同二五日に右の㊂を、その間に㊁も書写していることが考えられるほか、三重・専修寺には同じく顕智の筆になる㊃も伝えられていて、これらはいずれも同時期の貴重な写本として、師真仏のそれと共に重文指定となっている。[36]

文応元（一二六〇）年　庚申　親鸞八八歳

本願寺第七代存如、同第八代蓮如が関与する㊂の写本や版本に「親鸞八十八歳御筆」がみえるところより、[37] この歳を㊂の最終稿年とみなす説が有力である。[38] これを認めるならば㊂は、建長七年、康元元年・正嘉元年・正嘉二年・文応元年の五回にも及ぶ親鸞の手が入ったこととなり、五部の和讃のなかでも親鸞の思い入れひとしおなるものがあったのだろうと想像される。ただ存如・蓮如が依った㊂の原本が、いかなる素生のものなのか現今では、はっきりしないのと、親鸞八六歳時の「獲得名号自然法爾」の法語が入っていたり、それに続く最末の数行は、およそ和讃の体をなしていない文句となっているなど問題点が多いようにもおもわれる。首数は五本中もっとも多くて、総

計一〇四首を数える。正嘉二年再治本との顕著な相違点は「皇太子聖徳奉讃」一一首が、「仏智疑惑和讃」と「悲歎述懐和讃」の間に挿入付加されていることである。しかし該本は本願寺教団の隆盛発展と共に広く流布し、㊂といえば一般にこれを指すほどの著名な存在となっている。

かくて親鸞作の和讃は、その五部すべてにわたり少なくとも㊀は三回、㊁は二回、㊂は五回、㊃と㊄は各二回も、親鸞自身の手による増補改訂が頻繁になされていた事実を領解できたかとおもう。もっともこれは絶対年代を明記した奥書や和讃順序の異同、あるいは首数記載の相違などを基準にした回数であるから、本文の差異を考慮に入れるならば、その度数はさらに殖えることも十分ありうる。いずれにしてもこのような親鸞の和讃の創作増補改訂の精力的な活動は、実に七六歳から八八歳に至る老齢期であったことにわれわれは、あらためて驚きを禁じえないであろう。

三、林松院本『正像末法和讃』

さて、それはともかくとして、ここで稿者が注目したいのは、五部の親鸞作和讃のうち最多の五度もの増改を受けている㊂である。さきに記した通り㊂の萌芽は、建長七（一二五五）年親鸞八三歳の㊀付載別和讃八首にあり、ついでそのすぐあとの翌康元元（一二五六）年成立の同名異本「浄土和讃」一三首を経て、翌年の正嘉元（一二五

七）年に㊂四一首本として一往の独立をみる。しかしこれらは内容的にいまだ一貫性を欠く面が多分にあったためか、親鸞はさらにこれを翌二年に増補改訂整備する。残念ながらその親鸞自筆本は遺存しないが、それを直弟の顕智が三三年後の正応三（一二九〇）年に書写したものが、三重・専修寺蔵の重文本にほかならない。[39] 本願寺存如や蓮如が関係する写本や刊本の㊂は、正嘉二（一二五八）年本を重ねて増補した感を与えているが、親鸞の高齢化のせいか、必ずしも完成度の高い最終稿本にはなっていないこと、すでに指摘しておいたごとくである。

ところで、専修寺の重文顕智本㊂は、親鸞面授の高田門徒の重鎮が書写するものだけに、比類なき貴重な伝本といわなければならない。しかし意外なことにその正嘉二年本系の写本は、本願寺の存如・蓮如の写版本に比し格段に少なく、現在わかっているのは、文明一五（一四八三）年専修寺第一〇代真慧（一四三四～一五一二）が、文明一五（一四八三）年二月二四日に書写した三重・中山寺蔵本、[40] これを転写した三重・専修寺蔵重文本、[41] 同じく専修寺第一二代堯恵（一五二七～一六〇九）が写伝した三重・寿福院蔵本が、[42] 中世写本として知られる程度であるが、これら三本の真慧系写本の本文は、いずれも真慧の筆ではなく右筆とみられている。[43]

このほかに以下でとりあげる元禄七（一六九四）年六月二四～八日、祖益なるものが書写した山形・浄福寺蔵本、[44] 寛延二（一七四九）年一二月二日付の江戸坂東・報恩寺第一八代真利性晴（～一七六四）の極書がある愛知・本證寺林松院文庫蔵本（以下林松院本と略称）、上記の浄福寺蔵本を寛政一一（一七九九）年に深厲（香月院深励亀州一七四九～一八一七）が、蓮如の文明版と対比して刊行した『坊刊聚子三帖和讃』などが、[45] 江戸時代中期から後期の写版本として、近年注目を集めるようになってきている。

これらの正嘉二年系諸本は林松院本を除いて、いずれもみな専修寺蔵国宝本系の㈠・㈡と三帖セット本である点より（ただし中山寺蔵本は現在㈡を欠失する）、元来高田門徒が依用する『三帖和讃』であったとみてよいものであろう。

さて、いまここに初めて影印でその全文を示そうとする林松院本㈢は、顕智の正応三年書写重文本と同様、上記のごとく正嘉二年本系の江戸時代中期写本の一本であるけれども、この系統の他の写本とその内容を比較してみると、顕智本より古い要素もあって、どちらかといえば浄福寺本に近いものであることがわかり注意したい。

林松院本については、実はすでに真宗高田派専修寺前裏方常磐井和子氏が、三〇年も前に「田中本」として紹介された本である。[46] したがっていまさら正鵠を射た氏の玉稿に付け加えるべき点は何もないので、以下すこしく同氏の論考にもとずきながら、その概要を記述しておきたい。

常磐井氏はまず羽州本に注目される。羽州本というのは羽後国山形県酒田市浄福寺の祖明順（俗名菊池武明・〜一五三四）が、その兄で秋田市浄願寺を開いた弘賢（俗名菊池武弘・〜一五〇三）と共に文明三（一四七一）年、越前吉崎の蓮如より命を被って奥羽・蝦夷島へ教化に趣いた際、蓮如より授与された親鸞真蹟の『三帖和讃』といわれるもので、[47] これが浄福寺第一三代了隆公円（〜一七七九）・同一四代了現公勤父子の師匠であった香厳院恵然（一六九三〜一七六四）の注意するところとなって、[48] 寛政一一（一七九九）年深厲が『坊刊薬子三帖和讃』と題して刊行したこと上記の通りである。なお深厲の刊行本は、その後嘉永二（一八四九）年と明治初期に縮刻再刊合冊本が開版されており、後者は『諸本校合御草稿三帖和讃縮刻全』と改題した題箋が貼られて行なわれ、[49] 羽州本の存在は広く知られ

るようになった。

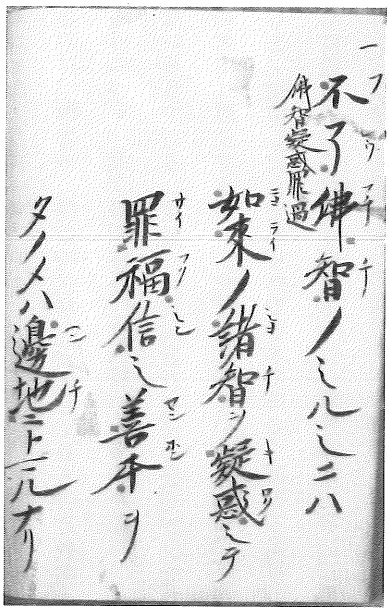
羽州本の原本は浄福寺第一五代海徳院公厳亀崎（一七五七～一八二一）の江戸時代後期まで存在したというが、親鸞真蹟といわれるものらしきこの『三帖和讃』は、現在同寺には存在せず、元禄七（一六九四）年六月京東六条の学寮において、僧祖益が書写した『三帖和讃』が残るばかりとなっている。しかし祖益書写本と寛政一一年の『坊刊三帖和讃』は、細部に至るまでよく一致しており、われわれは元禄七年の祖益書写本、寛政一一年の深厲版本より、いまはなきいわゆる羽州本の原本の面影を十分しのぶことができるのである。

常磐井氏は『御草稿三帖和讃』の名のもとに羽州本を使っておられるから、多分もっとも新しい明治版にもとずいておられるのだとおもうが、これを専修寺蔵真仏書写国宝本㈠・㈡、同蔵顕智書写重文本㈢と詳細に比較された結果、羽州本の㈠と㈡は「本文からみて国宝本よりわずかに下る伝本を」、そして㈢は「顕智本より遡る善本を、合わせ用いている」ことを明らかにされ、「これが『三帖和讃』として最高のテキストであるし、専修寺の伝統以外に於てもこの組合わせが行われていたことは、注目すべきこと」といわれ、さらに羽州本の㈢は「内容的にも顕智本より先立つと認められるから、これが（親鸞聖人）御自筆本で、又正嘉二年成立のその原本であることさえ、理論上は成り立つのである」と述べられる。そして氏は右の㈢の理解をより一層深める善本こそが、この「田中本」すなわち「林松院本」であることを次のごとく記されるのである。

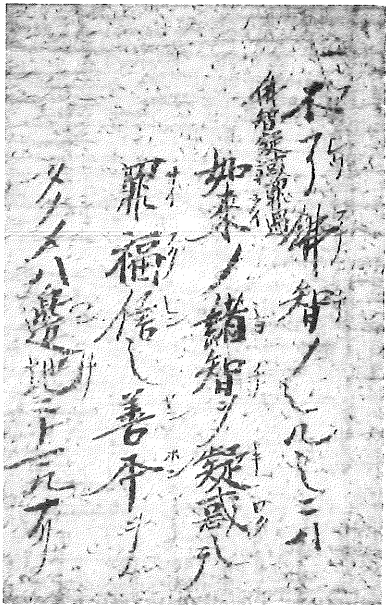
田中本（林松院本）には、聖人御真筆の由の鑑定状が付いていたが、実際は恐らく江戸時代の書写と思われる。

しかしたしかにこの本には、いかにも聖人の御真筆に通う雰囲気がある。和讃の各首で、第二行目以後を二字下げるのは、顕智本（鎌倉時代写）と同じである。片仮名も、聖人の時代の特徴の「ゝ（ツ）」「ヽ（ケ）」などたくさん目につく。漢字の字体も、聖人特有のものが散見されるも、特に「益」を「𦍒」と書くのは、聖人以外に例を見ないそうである（重見一行氏『教行信証の研究』二七三頁）。江戸時代にもなって、このような字体をお手本なしに自由に駆使する事は、一寸考えにくいから、この本は、鎌倉時代の本、あるいはその筆致筆勢まで忠実に伝えた本を、臨模したと考えられる善本である。顕智本系統の伝本は数が少なく、中でも『正像末法和讃』の書写内容ともに最古のものは顕智本であった。羽州本が内容的に顕智本を遡る本―顕智本が拠った本―であることは推測できるが、残念乍ら記号化して刊行されたものしか現存しない。そこへ、書写年代は新しいが聖人の時代の書風を残し、羽州本と並んで最も信頼すべき本文内容を持つ田中本（林松院本）が出現した意義は大きい。

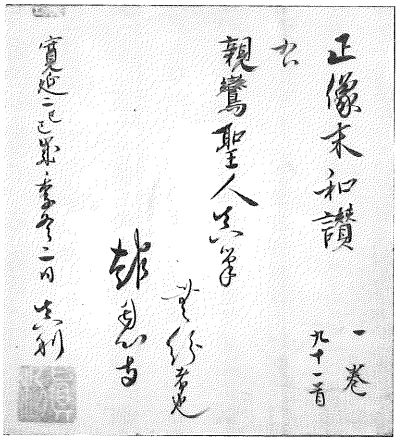
このように林松院本を高く評価された常磐井氏の帰結は、理路整然としておりきわめて説得力あるものと誰しも十分首肯できよう。ついては林松院本が依った親本が、どのようなものであったのかが少々気になる点だが、愛知県犬山市・立圓寺に掲載図版のごとき㊂所収「仏智疑惑和讃」第一首目の断簡一軸が蔵されている。[50] この和讃の筆法筆致は、驚くべきことに林松院本㊂の当該箇所のそれと見紛うばかりに似ている。立圓寺の断簡は、その筆風紙質圏発点より推し南北朝時代は下らないとみられ、おそらく親鸞自筆本を手許に置いて写しているのであろうとおもわれる。林松院本はそれが断簡状態になる以前に転写された本であったと推測しても不自然でないかも知れない。



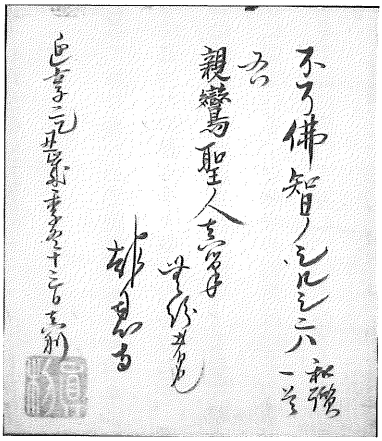
正像末法和讃所収
仏智疑惑讃第一首目
愛知県安城市本證寺林松院文庫蔵



正像末法和讃所収
仏智疑惑讃第一首目断簡
愛知県犬山市立圓寺蔵



寛延二（1749）年　報恩寺真利極書



延享二（1745）年　報恩寺真利極書

ただその場合立圓寺断簡の明確な連れの存在を聞かないので、あるいは不慮の災害などでたまたま残存した一枚が立圓寺断簡で、他は失われたという事態も、紙面の荒れ具合から想像してみることである。ちなみに立圓寺断簡には、林松院本㊂と同様の江戸坂東・報恩寺第一八代真利性晴（〜一七六四）の「親鸞聖人真筆／無紛者也」の極書が付されている。二つの極書は、前者が延享二（一七四五）年一二月（季冬）一三日、後者が寛延二（一七四九）年一二月（季冬）二日であったからその間わずかに四年、前者を「聖人真筆」と鑑定した真利は、筆蹟のきわめて酷似した後者も同じように「無紛者也」と極書したのも、無理からぬところがあったともいえよう（掲載図版参照）。

以上のような評価位置付けがなされている林松院本㊂を影印呈示するに当り、斯本の書誌と三重・専修寺蔵正応三（一二九〇）年顕智書写本、山形・浄福寺蔵羽州本系元禄七（一六九四）年祖益書写本との校異表を付し、この不備きわまりない拙き稿の結びに代えさせていただく。本稿をなすに当っては、真宗高田派本山専修寺前裏方常磐井和子氏の玉論なくしてはありえなかったし、また写本の調査撮影を許可された浄福寺住職菊池倫紀氏、寿福院住職眞岡慶光氏に対しても深甚の謝意を表したくおもう。さらに調査に同行された同朋大学佛教文化研究所の諸氏にも心よりあつくお礼申し上げる次第である。

『正像末法和讃』三本校異一覧

凡　例

1　正＝正像末之三時弥陀如来和讃　疑＝仏智疑惑罪過和讃　悲＝愚禿悲歎述懐和讃
2　首数番号
3　行数目
4　相異箇所の位置
5　顕智本の本文相異箇所
6　丁数
7　丁のオ（表）　ウ（裏）
8　真宗高田派教学院編　平松令三責任編集『影印高田古典』第二巻　顕智上人集　上　掲載ページ
9　浄福寺本の本文相異箇所
10　丁数
11　丁のオ（表）　ウ（裏）
12　龍谷大学仏教文化研究所編『三帖和讃』龍谷大学善本叢書二一　掲載ページ
※本書四〇五ページ下段と四〇六ページ上段は重複しているので、浄福寺本の実際の最終丁は（四九ウ）に奥書がくるも、今は本書掲示の（丁数オ・ウ）をそのまま記しておく。
13　林松院本の本文相異箇所
14　丁数
15　丁のオ（表）　ウ（裏）
16　本誌ページ

1	2	3	4	5 顕智本	6	7	8	9 浄福寺本	10	11	12	13 林松院本	14	15	16
				正											
				一											
				四	二	オ	183	泣キフナケクヘシトナリ	三	オ	400	泣キフナケクヘシトナリ	四	オ	34
				左訓											
				本文	二	ウ	186	カナ、ヌ	三	オ	401	カナワヌ	四	ウ	35
				本文	二	ウ	186	コトコトク	三	ウ	401	コトコトク	四	ウ	35
				コトヽヽク	二	ウ	186	コトコトク	三	ウ	401	コトコトク	四	ウ	35
				本願ホンクワン	三	オ	187	本願ホンクワン	四	オ	401	本願ホンクワン	五	オ	35
				第五タイコノ	三	ウ	188	第五タイコ	四	ウ	401	第五タイコ	五	ウ	35
				隠滞オムタイ	三	ウ	188	隠滞オンタイ	四	ウ	401	隠滞オンタイ	五	ウ	35
				信心ヲ文上	一	オ	183	信心ヲ文上	一	オ	399	信心ヲ文上	二	オ	33
				无上ノ	一	オ	183	无上ノ	一	オ	399	无上	二	オ	33
				我等ワレラ	一	オ	183	我等ワレラ	一	オ	399	我等	二	オ	33
				発ー起ホツ セシメ玉フ	一	オ	183	発ー起ホツ セシメ玉フ	一	オ	399	発ー起ホツ	二	オ	33
				方便ヲシテ	一	オ	183	方便ヲノ	一	オ	399	方便ヲノ	二	オ	33
				慈悲ノ	一	オ	183	慈悲	一	オ	399	慈悲	二	オ	33
				是レ	一	オ	183	是レ	一	オ	399	是	二	オ	33
				慚愧サムキ ハチ レハツ	一	オ	183	慚愧サムキス ハチレハツ	一	オ	399	慚愧サムキス	二	オ	33
				大オホキニ	一	オ	183	大オウキニ	一	オ	399	大オウキニ	二	オ	33
				敬ウヤマツテ	一	オ	183	敬ウヤマツテ	一	オ	399	敬ウヤマツテ	二	オ	33
				正像末法和讃 釈顕智			181	正像末 和讃			399	正像末和讃	一	オ	33
				外題											
				般舟讃文											
				振仮名	三	ウ	188	隠滞オムタイ	四	ウ	401	隠滞オンタイ	五	ウ	35
				送仮名	三	ウ	188	第五タイコノ	四	ウ	401	第五タイコ	五	ウ	35
				振仮名	三	オ	187	本願ホンクワン	四	オ	401	本願ホンクワン	五	オ	35
				本文	二	ウ	186	コトヽヽク	三	ウ	401	コトコトク	四	ウ	35
				本文	二	ウ	186	カナハヌ	三	オ	401	カナワヌ	四	ウ	35
				左訓				泣キフナケクヘシトナリ			400	泣キフナケクヘシトナリ			34
				四	二	オ	183	信心ヲ文上	一	オ	399	信心ヲ文上	二	オ	33
				四	二	オ	183	无上ノ	一	オ	399	无上	二	オ	33
				四	二	オ	183	我等ワレラ	一	オ	399	我等	二	オ	33
				四	二	オ	183	発ー起ホツ セシメ玉フ	一	オ	399	発ー起ホツ	二	オ	33
				四	二	オ	183	方便ヲシテ	一	オ	399	方便ヲノ	二	オ	33
				三	二	オ	183	慈悲ノ	一	オ	399	慈悲	二	オ	33
				三	二	オ	183	是レ	一	オ	399	是	二	オ	33
				二	二	オ	183	慚愧サムキス ハチ レハツ	一	オ	399	慚愧サムキス	二	オ	33
				二	二	オ	183	大オホキニ	一	オ	399	大オウキニ	二	オ	33
				二	二	オ	183	敬ウヤマツテ	一	オ	399	敬ウヤマツテ	二	オ	33
							181	正像末 和讃			399	正像末和讃	一	オ	33
				正像末法和讃 釈顕智											
				外題											
				般舟讃文											
				振仮名	三	ウ	188	隠滞オムタイ	四	ウ	401	隠滞オンタイ	五	ウ	35
				送仮名	三	ウ	188	第五タイコノ	四	ウ	401	第五タイコ	五	ウ	35
				振仮名	三	オ	187	本願ホンクワン	四	オ	401	本願ホンクワン	五	オ	35
				本文	二	ウ	186	コトヽヽク	三	ウ	401	コトコトク	四	ウ	35
				本文	二	ウ	186	カナハヌ	三	オ	401	カナワヌ	四	ウ	35
				左訓				泣キフナケクヘシトナリ			400	泣キフナケクヘシトナリ			34
				四	二	オ	183	信心ヲ文上	一	オ	399	信心ヲ文上	二	オ	33
				四	二	オ	183	无上ノ	一	オ	399	无上	二	オ	33
				四	二	オ	183	我等ワレラ	一	オ	399	我等	二	オ	33
				四	二	オ	183	発ー起ホツ セシメ玉フ	一	オ	399	発ー起ホツ	二	オ	33
				四	二	オ	183	方便ヲシテ	一	オ	399	方便ヲノ	二	オ	33
				三	二	オ	183	慈悲ノ	一	オ	399	慈悲	二	オ	33
				三	二	オ	183	是レ	一	オ	399	是	二	オ	33
				二	二	オ	183	慚愧サムキス ハチ レハツ	一	オ	399	慚愧サムキス	二	オ	33
				二	二	オ	183	大オホキニ	一	オ	399	大オウキニ	二	オ	33
				二	二	オ	183	敬ウヤマツテ	一	オ	399	敬ウヤマツテ	二	オ	33
							181	正像末 和讃			399	正像末和讃	一	オ	33

四	四	左訓	タマフ也	三	ウ	188	タマフナリ	四	ウ	401	タマフナリ	五	ウ	35
五	二	肩書	悲花経云	四	オ	189	悲華経云	五	オ	401	悲華経云	六	オ	35
五	三	左訓	ニマンサイ	四	オ	189	マンサイ	五	オ	401	ニマンサイ	六	オ	35
六	一	振仮名	劫(コフ)	四	ウ	190	刧(コフ)	五	ウ	402	刧(コウ)	六	ウ	36
八	一	左訓	盛(シヤウ)(サカリナリ)	五	ウ	192	盛(シヤウ)	六	ウ	402	盛(シヤウ)	七	ウ	36
八	四	左訓	壊(エ)(ホロ呆シ)	五	ウ	192	壊(エ)(ホロホシ)	六	ウ	402	壊(エ)(ホロホシ)	七	ウ	36
九	二	左訓	呆ロヒウス	六	オ	193	ホロヒウス	七	オ	402	ホロヒウス	八	オ	36
十一	一	左訓	オホキナリ	七	オ	195	オホキナリ	八	オ	403	オ呆キナリ	九	オ	37
十一	三	左訓	出(シユツ)(呆トケニ)	七	オ	195	出(シユツ)(ホトケニ)	八	オ	403	出(シユツ)(ホトケニ)	九	オ	37
十二	三	本文	人ヲミテ	七	ウ	196	人ヲミテ	八	ウ	403	人ヲミナ	九	ウ	37
十二	四	左訓	ホロ呆スナリ	七	ウ	196	ホロホスナリ	八	ウ	403	ホロホスナリ	九	ウ	37
十四	二	左訓	ホムフ	八	ウ	198	ホンフ	九	ウ	404	ホンフ	一〇	ウ	38
十五	一	振仮名	心(シム)	九	オ	199	心(シン)	一〇	オ	404	心(シム)	一一	オ	38
十五	三	振仮名	凡愚(ホムク)ハ	九	オ	199	凡愚(ホンク)ハ	一〇	オ	404	凡愚	一一	オ	38
十五	四	本文	セシムヘキ	九	オ	199	セシムヘキ	一〇	オ	404	セシムヘシ	一一	オ	38
十八	二	振仮名	五劫(ココフ)	一〇	ウ	202	五刧(ココフ)	一一	ウ	405	五刧(ココフ)	一二	ウ	39
廿一	一	振仮名	廻向(エカウ)ニ	一二	オ	205	廻向ニ	一三	オ	405	廻向ニ	一四	オ	39
廿一	一	振仮名	帰入(クヰニフ)シテ	一二	オ	205	帰入シテ	一三	オ	405	帰入シテ	一四	オ	39

廿一	二	振仮名	願作(クワンサ)佛心(フチシム)	一二	オ	205	願作佛心	一三	オ	405	願作佛心	一四	オ	39
廿一	三	振仮名	自力(シリキ)ノ廻向(エコウ)	一二	オ	205	自力ノ廻向	一三	オ	405	自力ノ廻向	一四	オ	39
廿一	四	振仮名	利益有情(リヤクウシヤウ)	一二	オ	205	利益有情	一三	オ	405	利益有情	一四	オ	39
廿二	一	左訓	ホンカンヲタイカイノミツニタトヘマフス也	一二	ウ	206	ホンカンヲタイカイノミツニタトヘマフス也	一四	ウ	406	(左訓なし)	一四	ウ	40
廿二	三	本文	ナラヒニハ	一二	ウ	206	ナラヒニテ	一四	ウ	406	ナラヒニテ	一四	ウ	40
廿四	四	本文	ニハイタルナリ	一三	ウ	208	ニハイタルナリ	一五	ウ	407	ニイタルナリ	一五	ウ	40
廿八	四	振仮名	門(モン)	一五	ウ	212	門	一七	ウ	407	門(モン)	一七	ウ	41
廿九	一	本文	尊號	一六	オ	213	尊號	一八	オ	408	尊号	一八	オ	41
三十	四	本文	信者(シンシヤ)ソタマワレル	一六	ウ	214	信者(シンシヤ)ノ身(ミ)ニミテリ	一八	ウ	408	信者(シンシヤ)ノ身(ミ)ニミテリ	一八	ウ	42
卅一	四	振仮名	念佛	一七	オ	215	念(子)佛	一九	オ	408	念佛	一九	オ	42
卅三	二	左訓	タイホタイシム	一八	オ	217	ホタイシム	二〇	オ	409	ホタイシム	二〇	オ	42
卅三	四	振仮名	佛恩(フチオム)	一八	オ	217	佛恩(フチオン)	二〇	オ	409	佛恩(フチオム)	二〇	オ	42
卅五	一	左訓	オホキナル	一九	オ	219	オホキナル	二一	オ	409	オ早キナル	二一	オ	43
卅五	一	左訓	タトヘマフス也	一九	オ	219	タトエマフス也	二一	オ	409	タトエマフス也	二一	オ	43
卅五	二	左訓	智眼(チケン)〔左訓：チヱノマナコナリ〕	一九	オ	219	智眼(チケン)	二一	オ	409	智眼(チケン)	二一	オ	43
卅五	三	左訓	船筏(セムハチ)〔左訓：ミタノクワンヲフ子 イカタニタトヘタルナリ〕	一九	オ	219	船筏(センハチ)〔左訓：ニタノクワンノフ子 イカタニタトヱタリ〕	二一	オ	409	船筏(センハチ)〔左訓：ミタノクワンノフ子 イカタニタトヱタリ〕	二一	オ	43
卅六	二	本文	罪業(サイコフ)	一九	ウ	220	罪業(サイコウ)	二一	ウ	410	罪業(サイコウ)	二一	ウ	43
卅七	一	首数番号	(あり)	二〇	オ	221	(なし)	二二	オ	410	(あり)	二二	オ	43

廿九	廿九	四十	四十	四十	四十	冊一	冊二	四十三	四十三	四十四	四十五	四十五	冊六	冊七	冊九	冊九	冊九	冊九	五十
一	四	一	三	三	三	三	四	二	四	四	二	一	四	四	一	二	四	四	一
首数番号	左訓	左訓	左訓	振仮名	本文	左訓	振仮名	本文	本文	本文	本文	振仮名	本文	本文	本文	本文	本文	本文	本文
（あり）	スナワチ	ワルクナリユクトナリ	アラワセリ	蓮華面經（レンクエメンキヤウ）	八萬劫（ハチマンコフ）	滅度（メチト）	護念（クヤウチチヤウチチヤウハンナリ）	早トハ	早トヲ	還相（クヱンサウ）	マウアハヌ	オソサトリケル	ナホカタシ	オ早カラス	カスオ早シ	劫ヨリ（コフ）	南无阿弥陀佛（ナモアミタフチ）		
二一	二一	二一	二一	二一	二二	二二	二二	二三	二三	二四	二四	二四	二四	二五	二六	二六	二六		
オ	オ	ウ	ウ	ウ	オ	ウ	オ	オ	ウ	オ	オ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ		
223	223	224	224	224	225	226	227	228	229	229	229	230	231	233	233	233	233		
（なし）	スナワチ	ワルクナリユクトナリ	アラワセリ	蓮華面經（レンケメンキヤウ）	八萬劫（ハチマンコフ）	滅度（メチト）	護念（クヤウチチヤウチチヤウハンナリ）	ホトハ	ホトヲ	還相（ケンサウ）	マフアハヌ	オソサトリケル	ナホカタシ	オホカラス	カスオホシ	劫ヨリ（コフ）	南無阿弥陀佛（ナムアミタフチ）		
二三	二三	二三	二三	二三	二四	二四	二五	二五	二五	二六	二六	二六	二七	二八	二八	二八	二八		
オ	オ	ウ	ウ	ウ	オ	ウ	オ	オ	ウ	オ	オ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ		
410	410	411	411	411	411	411	411	411	412	412	412	412	412	413	413	413	413		
（あり）	スナハチ	ワルクナルユクナリ	アラハセリ	蓮華面經（レンクエメンキヤウ）	八萬劫（ハチマンコフ）	滅度（メチト）	護念（クヤウチチヤウチチヤウハンナリ）	ホトハ	早トヲ	還相（ケンサウ）	マウアハヌ	オサトリケル	ナ早カタシ	オ早カラス	カスオ早シ	劫ヨリ（コフ）	南无阿弥陀佛（ナモワアミタフチ）		
二三	二三	二三	二三	二三	二四	二四	二五	二五	二五	二六	二六	二六	二七	二八	二八	二八	二八		
オ	オ	ウ	ウ	ウ	オ	ウ	オ	オ	ウ	オ	オ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ		
44	44	44	44	44	44	45	45	45	45	45	45	46	46	46	46	46	46		

								疑													
七	六	四	四	四	四	三	三	五十七	五十七	五十七	五十七	五十六	五十三	五十三	五十二	五十二	五十				
二	二	四	三	三	一	四	一	四	二	二	一	二	四	二	三	二	四				
左訓	本文	本文左訓	左訓	左訓	振仮名	本文	振仮名	本文	本文	本文	本文	左訓	本文	振仮名	本文	本文	振仮名				
ハナニフウマル、ナリ	菩本（センホン）	牢獄（ラウコク） シリーノ	ツナカムトタトヘタリ	タトヘタリ	王子	却（コフ）	疑惑ノ罪（キワクノツミ）	早メタマフ	ヨロコメハ	オ早キニ	ウル人ヲ	アワレミ	南无阿弥陀佛ト（ナモアミタフチ）	人ハ（ヒト）	ウカヒツ、	船（フネ）	廻入セリ（エニフ）				
三四	三四	三三	三三	三三	三三	三二	三二	三〇	三〇	三〇	三〇	二九	二八	二八	二七	二七	二六				
ウ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	ウ	オ	オ	ウ	ウ	ウ				
250	250	247	247	247	247	246	246	241	241	241	241	240	237	237	236	236	234				
ハナニフクマル、ナリ	善本（センホン）	牢獄（ラウコク） シリキノ	ツナカムトタトヱタリ	タトヱタリ	王子（ワウシ）	刼（コフ）	疑惑ノ罪	ホメタマフ	ヨロコヘハ	オホキニ	ウル人ヲ	アワレミ	南無阿弥陀佛ト（ナモアミタフチ）	人ハ（ヒト）	ウカミツ、	船（フネ）	廻入セリ				
三六	三六	三五	三五	三五	三五	三四	三四	三二	三二	三二	三二	三一	三〇	三〇	二九	二九	二八				
ウ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	ウ	オ	オ	ウ	ウ	ウ				
417	417	416	416	416	416	416	416	415	415	415	415	415	414	414	414	414	413				
ハナニフクマル、ナリ	菩本（センホン）	牢獄（ラウコク） シリキノ	ツナカントタトエタリ	タトエタリ	王子（ワウシ）	刼（コフ）	疑惑ノ罪（キワクノツミ）	ホメタマフ	ヨロコメハ	オ早キニ	ウル人ハ	アハレミ	南无阿弥陀佛ト（ナモアミタフチ）	人ハ	ウカヒツ、	船（フネ）	廻入セリ（エニフ）				
三六	三六	三五	三五	三五	三五	三四	二四	三二	三二	三二	三二	三一	三〇	三〇	二九	二九	二八				
ウ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	ウ	オ	オ	ウ	ウ	ウ				
51	50	50	50	50	50	50	50	48	48	48	48	48	47	47	47	47	47				

	悲																		
二	二	廿二	十九	十九	十七	十六	十五	十五	十四	十一	九	九	九	八	八	八	七		
三	一	一	二	二	二	二	三	三	四	四	四	四	二	四	三	二	三		
本文	本文	振仮名	本文	本文	本文	本文	本文	本文	振仮名	本文	本文	本文	本文	本文	本文	本文	左訓		
貪瞋邪偽 トムシンシヤキ	ヒトコトニ	人ハ ヒト	善本 センポン	罪福 サイフク	罪福 サイフク	牢獄ニ ラウコク	タノミニテ	菩本	化生	モロ〳〵	タトエタリ	牢獄 ラウコク	智慧 チエ	菩本 センポン	フカク	ナホモマタ	ムマルヽトイフ		
四三	四三	四二	四〇	四〇	三九	三九	三八	三八	三八	三六	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三四		
ウ	ウ	オ	ウ	ウ	ウ	オ	ウ	ウ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	ウ		
268	268	265	262	262	260	259	258	258	257	254	252	252	252	251	251	251	250		
貪瞋邪偽 トムシンシヤキ	ヒトコト	人ハ	善本 センポン	罪福 サイフク	罪福 サイフク	牢獄ニ ラウコク	タノミツヽ（ニテ）	善本	化生 クエシヤウ	モロ〳〵	タトエタリ	牢獄 ラウコク	智慧 チエ	善本 センポン	フカク	ナホモマタ	ムマルヽトイフ		
四五	四五	四四	四二	四二	四一	四一	四〇	四〇	四〇	三八	三七	三七	三七	三七	三七	三七	三六		
ウ	ウ	オ	ウ	ウ	ウ	オ	ウ	ウ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	ウ		
422	422	421	420	420	420	419	419	419	419	418	418	418	418	417	417	417	417		
貪瞋邪偽 トムシンシヤキ	ヒトコトニ	人ハ ヒト	菩本 センポン	罪福 サイフク	罪福 サイフク	牢獄ニ ロウコク	タノミニテ	善本	化生 クエシヤウ	モロ〳〵	タトエタリ	牢獄 ラウコク	智慧 チエ	善本 センポン	スカク	ナ早モマタ	ムマルヽトナリ		
四五	四五	四四	四二	四二	四一	四一	四〇	四〇	四〇	三八	三七	三七	三七	三七	三七	三七	三六		
ウ	ウ	オ	ウ	ウ	ウ	オ	ウ	ウ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	ウ		
55	55	54	54	54	53	53	53	53	52	52	51	51	51	51	51	51	51		

	二	三	本文	オ早キ	四三	ウ	268	オホキ	四五	ウ	422	オ早キ	四五	ウ	55				
	三	二	左訓	蛇蝎（シヤカチ）	四四	オ	269	蛇蝎（シヤカチ）ヘヒクチナハヱハミ	四六	オ	422	蛇蝎（シヤカチ）ヘヒクチナハヱハミ	四六	オ	55				
	三	三	本文	修菩（シユコセン）	四四	オ	269	修善（シユコセン）	四六	オ	422	修菩（シユコセン）	四六	オ	55				
	四	一	本文	无慚无愧（ムサムムク井）	四四	ウ	270	无慚无愧（ムサムムク井）	四六	ウ	422	无慚无愧（ムサムムク井）	四六	ウ	56				
	五	一	首数番号	（あり）	四五	オ	271	（あり）	四七	オ	422	（なし）	四七	オ	56				
	五	三	本文	願船（セム）	四五	オ	271	願船（セム）	四七	オ	422	願船（セム）	四七	オ	56				
	七	一	本文	五濁増	四六	オ	273	五濁増	四八	オ	423	五濁増	四八	オ	56				
	七	二	本文	コト丶ク	四六	オ	273	コト〳〵ク	四八	オ	423	コト〳〵ク	四八	オ	56				
	八	二	本文	吉日（キチニチ）	四六	ウ	274	吉日（キチニチ）	四八	ウ	423	吉月（キチゴチ）	四八	ウ	57				
	八	四	左訓	祀（シ）ハラエ	四六	ウ	274	祀（シ）ハラヒ	四八	ウ	423	祀（シ）ハラヒ	四八	ウ	57				
	十	一	首数番号	（あり）	四七	ウ	276	（なし）	四九	ウ	424	（なし）	四九	ウ	57				
	十一	一	首数番号	（あり）	四八	オ	277	（なし）	五〇	オ	424	（なし）	五〇	オ	57				
	十一	三	振仮名	威儀（井キ）	四八	オ	277	威儀（井キ）	五〇	オ	424	威儀	五〇	オ	57				
	十一	四	本文	尊敬ス	四八	オ	277	尊敬ス	五〇	オ	424	尊敬ス	五〇	オ	57				
奥書				草本云 正嘉二歳九月廿四日 親鸞八十六歳 正應三年庚寅九月廿五日 令書写之早				正喜二歳九月廿四日 親鸞八十六歳				正嘉二歳九月廿四日 巳挍合清書畢 親鸞八十六歳								

涅槃経言文	観念法門云文							
（あり）								
四九								
オ								
279								
（なし）								
（なし）								

林松院文庫本『正像末法和讃』の書誌概要

所蔵者　本證寺林松院文庫

所在地　愛知県安城市野寺町野寺二六

書名　正像末法和讃

著作者　親鸞　八六歳

成立年代　正嘉二（一二五八）年九月二四日

写刊本　写本

冊数　一冊

本文　全存

外題　なし

装訂　四つ目袋綴じ　上下二つ目へ数本の糸を別に通し切断防止策を講じている

表紙　紺地金襴雲形紋様包背装仕立
見返　金張り厚紙
寸法　縦二七・九cm　横二〇・五cm　美濃紙判大
料紙　楮紙　全丁紙総裏打　料紙折目と天地小口に塗金す
丁紙数　墨付五一丁　後補白紙表裏見返後各一丁
首題　正像末和讃　原表紙中央の外題で本文と同筆　この外題左下方に報恩寺の鑑定割印が押されている
内題　三丁目裏中央に正像末法和讃とある
行字数　半丁四行　一行一〇字内外
用字　漢字片仮名
漢字振仮名　あり
四声圏発点　小朱印にて●■で示す
左訓有無　あり
尾題　なし
奥書　正嘉二歳九月廿四日／已校合清書畢／親鸞八十六歳
奥書右下方に原表紙中央外題左下方と同じ報恩寺の鑑定割印が押されている
書写筆者　不明　全文一筆　親鸞の筆風を臨模する

書写年代　寛延二（一七四九）年以前　江戸時代中期十八世紀初頭頃の写本か

納入箱書　外箱墨書「正像末和讃　一冊」内箱金泥書「親鸞聖人御真筆／正像末和讃　一冊」

添付文書　三点あり　㈠寛延二（一七四九）年季冬（一二月）二日付報恩寺真利鑑定書　㈡明治三一（一八九八）年一月付田中岩太郎宛神山律譲証　㈢平成一八（二〇〇六）年九月二九日付本證寺宛田中真預願書

註

(1)この標挙文は親鸞の主著『顕浄土真実教行証文類』（『教行信証』）の総序と教巻の間に置かれる文であるが、親鸞自筆の京都・東本願寺蔵国宝坂東本における当該箇所は、現在闕失のためみることはできない。建長七（一二五五）年六月二二日に親鸞面授の門侶専信坊専海（〜一二六五）が筆写した『教行信証』を、同年冬に専信の師真仏（一二〇九〜五八）が転写したものと考えられている三重・専修寺蔵重文高田本のそれは、総序の直後にこの文を置く。一方これに対し文永一二（一二七五）年の写本と考定される京都・西本願寺蔵重文本『教行信証』では、教巻本文の前と後にこの文が重複して掲載されており、本来の位置がどこであったのか問題といえよう。赤松俊秀・藤島達朗・宮崎圓遵・平松令三・名畑崇編『増補　親鸞聖人真蹟集成』第一巻　教行信証　上　法藏館　二〇〇五年　一三〜四ページ。

生桑完明・平松令三編『専修寺本　顕浄土真実教行証文類』上巻　法藏館　一九七五年　一三ページ。

浄土真宗本願寺派総合研究所監修『本願寺蔵　顕浄土真実教行証文類』縮刷本上『教行信証』の研究第三巻　浄土真宗本願寺派宗務所　二〇一二年　一二頁・二四頁。

(2)親鸞の著作は漢文撰述書が四部（『顕浄土真実教行証文類』元仁元（一二二四）年五二歳、『入出二門偈頌』建長四（一二五二）年八〇歳、『浄土文類聚鈔』建長七（一二五五）年八三歳、『愚禿鈔』建長七（一二五五）年八三歳）。和讃が五部（『浄土和讃』・『浄土高僧和讃』宝治二（一二四八）年七六歳、『皇太子聖徳奉讃』建長七（一二五五）年八三歳、『大日本国粟散王聖徳太子奉讃』康元二（一二五七）年八五歳、『正像末法和讃』正嘉元（一二五七）年八五歳）。和文撰述書が一〇部（『唯信鈔文意』建長二（一二五〇）年七六歳、『一念多念文意』康元二（一二五七）年八五歳以前、『尊号真像銘文』建長七

（一二五五）年八三歳本・正嘉二（一二五八）年八六歳本、『浄土三経往生文類』建長七（一二五五）年八三歳本・正嘉二（一二五八）年八六歳本、『往相回向還相回向文類』康元元（一二五六）年八四歳、『上宮太子御記』正嘉元（一二五七）年八五歳、『善導和尚言』正嘉二（一二五八）年八六歳以前、『弥陀如来名号徳』文応元（一二六〇）年八八歳）があるほか、法語を含む消息類が四二通ほど伝わっている。

(3)多屋頼俊『和讃史概説』・『和讃の研究』（『多屋頼俊著作集』第一巻・第二巻所収）法藏館　一九九二年。

(4)龍谷大学仏教文化研究所編『三帖和讃』龍谷大学善本叢書二一所収「三帖和讃―古写本刊本・研究文献―」龍谷大学　二〇〇一年　六六九ページ。

(5)註（4）の一～二一五ページに龍谷大学蔵文明五年蓮如開版『三帖和讃』が収録されている。

(6)『増補　親鸞聖人真蹟集』第三巻　法藏館　二〇〇七年　一三三・二七〇～一ページ。

(7)一連の和讃である㈠・㈡が成立した宝治二（一二四八）年一月二一日は、建暦二（一二一二）年一月二五日八〇歳で浄土に還帰した親鸞の恩師法然房源空の三七回忌に相当するので、両讃はその命日を期して作られたものとおもわれる。拙著『親鸞と真宗絵伝』法藏館　二〇〇〇年　九七ページ。

(8)堅田　修編『真宗史料集成』第二巻　同朋舎　一九七七　七四三ページ。

真宗史料刊行会編・神田千里担当『大系真宗史料』文書記録編三　戦国教団　法藏館　二〇一四年　三九・六三ページ。

(9)佐々木求巳『真宗典籍刊行史稿』伝久寺　一九七三年　一一五ページ。

大谷大学図書館編『楠丘文庫目録』大谷大学図書館　一九九七年　八八ページ。

(10)常磐井和子「三帖和讃の諸本について」（『真宗研究）第三二輯　一九八七年）一三七ページ。

(11)真宗高田派教学院編『影印高田古典』第二巻顕智上人集（上）真宗高田派宗務院　一九九九年　三～一五四ページ。

文化庁文化財部美術学芸課『専修寺聖教目録』文化庁　九ページ。

(12)高山寺典籍文書綜合調査団代表者築島裕編『高山寺典籍文書の研究』―高山寺資料叢書別巻―　東京大学出版会　一九八〇年所収の山口佳紀「高山寺本古和讃集の研究」各論篇七〇九～三五ページ。翻字篇一〇一六・一〇二四・一〇二八、一〇三七～八・一〇四三・一〇四六ページより、親鸞作建長七年本㈢付載の巻尾別和讃第四・五首目の典拠が次のようにわかる。ちなみにこの二首は、正嘉元（一二五七）年同じく親鸞作の草稿本と呼ばれる三重・専修寺蔵国宝本㈢の最末第三九・四〇

首目にも出てくるが、㈠と㈢では掲載順序が前後入れ替わっている。また、蓮如の文明版㈢とは「无明法性」讃がなく、「罪業モトヨリ」讃も文面が異なることに留意しておきたい。

建長七年親鸞作㈠　永久四年『高山寺本古和讃集』―和讃名・ページ・行―

无明法性コトナレト……无明法性殊　守護天台讃　一〇二八・一〇四六ページ　二五四行目
心ハスナワチ一ナリ……覚トレハ其〔躰〕一なり　守護天台讃　一〇二八・一〇四六ページ　二五五行目
コノ心スナワチ涅槃ナリ……（この行に該当する文は本集にない。次行を含め親鸞作㈠諸経讃七の「如来スナワチ涅槃ナリ」が、関係文として想起される。）
コノ心スナワチ如来ナリ……此ノ心即如来蔵　本覚心要讃　一〇二四・一〇四三ページ　一六四行目
罪業モトヨリ所有ナシ……罪業本〔上引〕所有无　普賢讃　一〇一六・一〇三七ページ　一四行目
妄想顛倒ヨリオコル……妄想顛倒ヨリ起〔コル〕　普賢讃　一〇一六・一〇三八ページ　一七行目
心性ミナモトキヨケレハ……心性源〔ト〕清シテ　普賢讃　一〇一六・一〇三八ページ　一六行目
衆生スナワチ仏ナリ……衆生即〔チ〕仏〔ナリ〕　普賢讃　一〇一六・一〇三七ページ　一五行目

(13)注（11）の『影印高田古典』第二巻一五〇ページ。

(14)真宗高田派教学院編『影印　高田古典』第三巻　顕智上人集（中）真宗高田派宗務院　二〇〇一年　二六三ページ。

(15)㈠・㈡・㈢の『三帖和讃』のうち顕智筆写の㈢は現存しないが、かつてそれが存した事実は、文明十五（一四八三）年の真慧本系『三帖和讃』㈢の源空讃第一一首二行目の左訓に「コレハケンチシヤウニンノコホンニハヒシリトアリ」と明記されているところからもわかり、また三重・専修寺には、「浄土和讃二冊／正像末和讃一冊／右／顕智上人御筆」と墨書された江戸時代中後期頃の納入袋があり、「浄土和讃二冊」のうちの一冊が、一連の「浄土高僧和讃」に該当することがいえる点からも、顕智筆㈢の存在は確実とみてよかろう。

三栗章夫・岡村喜史「三帖和讃の書誌について」注（4）所収　六四三ページ。

注（11）の『影印　高田古典』第二巻二八三・六一六ページ。

(16)真宗高田派教学院編『影印　高田古典』第一巻　真仏上人集　真宗高田派宗務院　一九九六年　九〇～一ページ。

(17)拙著『続・親鸞と真宗絵伝』法藏館　二〇一三年　三七～九ページ。
(18)本井信雄「『皇太子聖徳奉讃』恵空書写本考」『大谷学報』六〇―四　一九八一年。
(19)『増補　親鸞聖人真蹟集成』第九巻　法藏館　二〇〇六年　三五九～六〇・三六八ページ。
注（7）の拙著一四一～五ページ。注（17）の拙著五九～六九ページ。
(20)康元元年の『浄土和讃』所収の一三首が、正嘉元年の『正像末法和讃』の第何首目に相当するかを示しておくと次のようになる（上『浄土和讃』、下『正像末法和讃』の首数番号）。
一＝二一、二＝七、三＝二五、四＝二六、五＝一〇、六＝一一、七＝八、八＝九、九＝一、一〇＝二、一一＝三、一二＝三七、一三＝三八。
(21)注（17）の拙著八二ページ。
(22)常磐井和子「康元二年夢告和讃考」『高田学報』第七六輯　一九七八年。
(23)『法然上人行状画図』第三三巻第一段
井川定慶集解『法然上人伝全集』法然上人伝全集刊行会　一九五二年　二二四ページ。
(24)元弘元（一三三一）年覚如宗昭（一二七〇～一三五一）六二歳成立『口伝鈔』中―一三「蓮位房夢想の記」。
龍谷大学仏教文化研究所編『口伝鈔　改邪鈔』龍谷大学善本叢書一一　龍谷大学　一九九二年　六四・一四六・二四二ページ。
康永二（一三四三）年覚如宗昭七四歳成立『本願寺聖人伝絵』上巻本第四段「蓮位夢想段」。
真宗史料刊行会編小山正文担当『大系真宗史料』特別巻絵巻と絵詞　法藏館　二〇〇六年　二二～三・三二～三・四四・五二～三・一〇六～七・一一九・一二三ページ。
(25)宮崎圓遵「一百十四首太子和讃の写伝本と原形」（『宮崎圓遵著作集』第六巻『真宗書誌学の研究』所収）思文閣出版　一九八八年　二五七～八五ページ。
(26)㈤の初稿本は一一四首で、それが再治本で一一五首になったのであろうことは、前注の宮崎論文でもいわれているところであるが、㈤が㈣とセット本の可能性がある点より、稿者は㈤の初稿は㈣が成った建長七年頃、再治は康元二年で、この時親鸞は愛弟子覚信に㈣を再写し合わせて授与したのではないかとみている。

注（6）の拙著四五九～六八ページ。
(27)日下無倫「大日本国粟散王聖徳太子奉讃について」『大谷学報』九―四　一九三八年。
(28)本願寺派宗学院編『真宗聖教現存目録』永田文昌堂　一九七六年　三四二～三ページ。注（25）の宮崎論文。
(29)注（17）に同じ。
(30)注（18）に同じ。
(31)『増補　親鸞聖人真蹟集成』第三巻　法藏館　二〇〇七年　二七三ページ。
(32)同右　第一〇巻　同右　一五・一三九ページ。
(33)同右　第四巻　同右　二〇〇六年　四一六ページ。
この「たかたの入道殿御返事」において、親鸞は「かくねむはう」、「かくしんはう」、「かくねんはう」の三人の名を出すが、これはそれぞれ「覚念坊」、「覚信坊」、「覚然坊」の書き別けで、「覚念（かくねむ）」と「覚然（かくねん）」は当時、音のうえからも別人であることが、わかるようになっていた点でも興味深くおもわれる。
(34)平松令三「真仏上人の生涯」・「真仏上人の筆跡」注（16）の五三七～四六ページ。
(35)注（11）の『影印　高田古典』第二巻　二七八ページ。
(36)注（11）の『専修寺聖教目録』九ページ。
(37)注（4）の二〇六・三二一・五三〇ページ。
(38)宮崎圓遵氏は注（25）の二四〇ページにおいて、「御筆」とあるため、これは後人の加筆とも見られるが、写本の中にはこの二字のないものもあるから、もとは「親鸞八十八歳」と終りに自署していたものであろう、と記している。しかし稿者は「御筆」のない㊂の写本に未だ接したことがない。識者の教示を切念したい。ここはむしろ注（10）一五〇ページで、常磐井氏もいわれるごとく本願寺系の存如や蓮如本㊂に付載される正嘉二年の法語『獲得名号自然法爾』が、親鸞八六歳であったのを八八歳と訛伝している可能性が高いのでないかと考える。
(39)注（11）の『影印　高田古典』第二巻　一八一～二八〇ページ。同『専修寺聖教目録』九ページ。
(40)生桑完明『親鸞聖人撰述の研究』法藏館　一九七〇年　八七ページ。注（4）の五四八～五〇ページ。

惜しむらくは中山寺本は『三帖和讃』のうち㊀を欠く。

(41)注（11）の『専修寺聖教目録』二〇ページ。

(42)寿福院本の筆者については、専修寺一〇代真慧（一四三四～一五一二）、同一二代堯恵（一五二七～一六〇九）、同一三代堯真（一五四九～一六一九）の三説がある。真慧説は一九二九年の『現代佛教』にもとずき、注（4）六七七ページにみえるもの。堯恵説は生桑完明氏の注（40）九三ページ、一九八〇年の『高田の寺々』一四九ページでいわれる説。堯真説は一九九一年の『高田本山の法義と歴史』九八ページ、二〇一五年三重県総合博物館の『親鸞高田本山専修寺の至宝』一八二ページに記されるところである。それぞれ権威ある書籍でいわれるものだけに、われわれは判断に迷わざるをえないが、去る平成二七（二〇一五）年八月六日（木）の同朋大学佛教文化研究所による実査で、堯恵説の正しいことが判明したから、ここに報告しておく次第である。

(43)注（40）の八六・九二～三ページ。

(44)注（4）の三二九～四二四ページ。

(45)注（9）の『真宗典籍刊史稿』七〇〇～一ページ。

(46)常磐井和子「『御草稿三帖和讃』の評価と正像末法和讃の新出善本」『高田学報』第七六輯　一九八七年。

(47)注（3）の『多屋頼俊著作集』第二巻　一七六ページ。

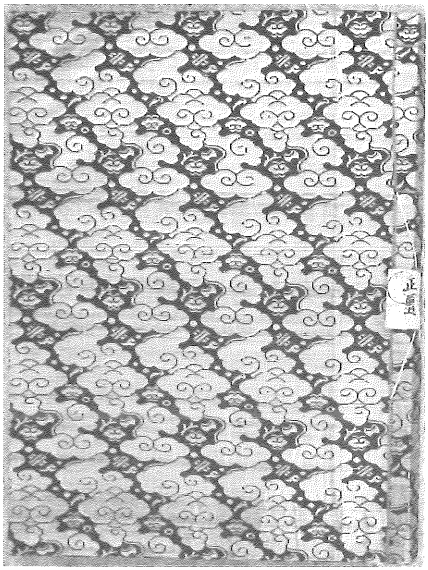
北海道開教史編纂委員会編『北海道の西本願寺』本願寺札幌別院　二〇一〇年　五～二五ページ　金龍静氏執筆第一章。

(48)注（9）注（45）の七〇一ページ。

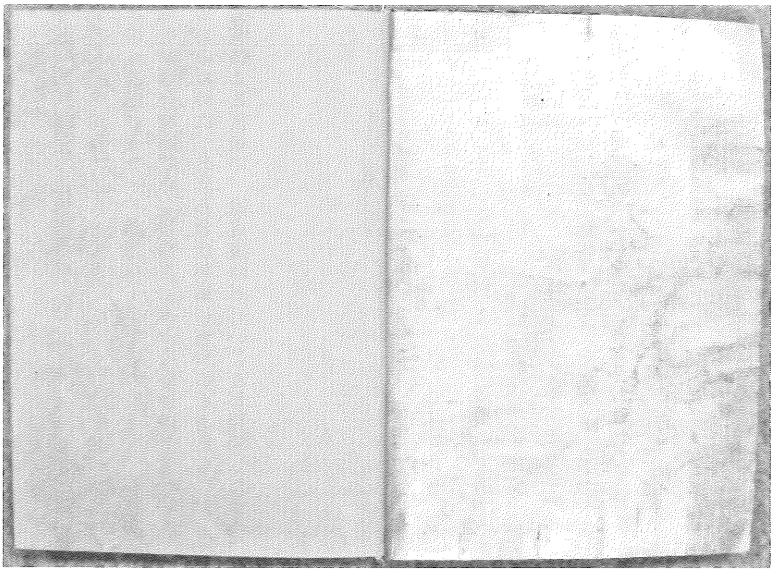
(49)同右八二八ページ。

(50)平成二七（二〇一五）年四月二二日（水）実査。縦二五・五×横一五・六cm。本文墨書。漢字には振仮名があり、朱印によるとおぼしい圏発点もみられる。断簡の調査を快諾された立圓寺住職田中満氏に、ありがたくあつくお礼申し上げる。

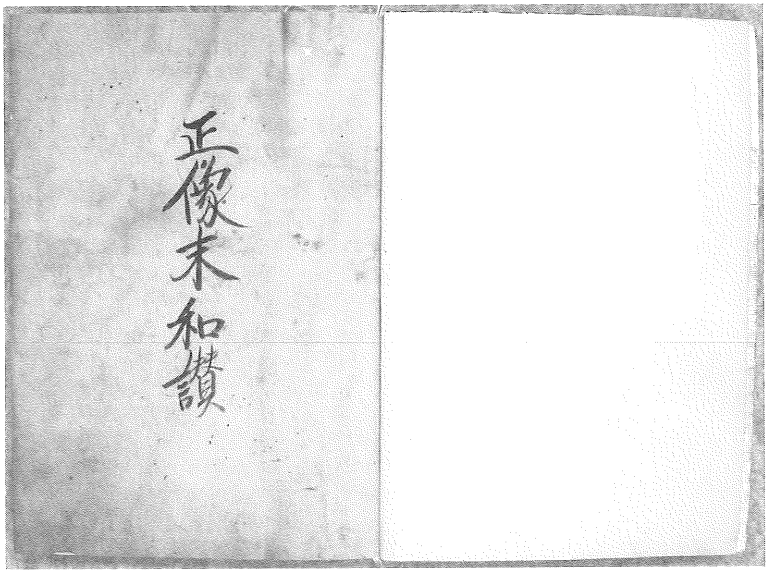
〔平成二七（二〇一五）年七月二三日〕



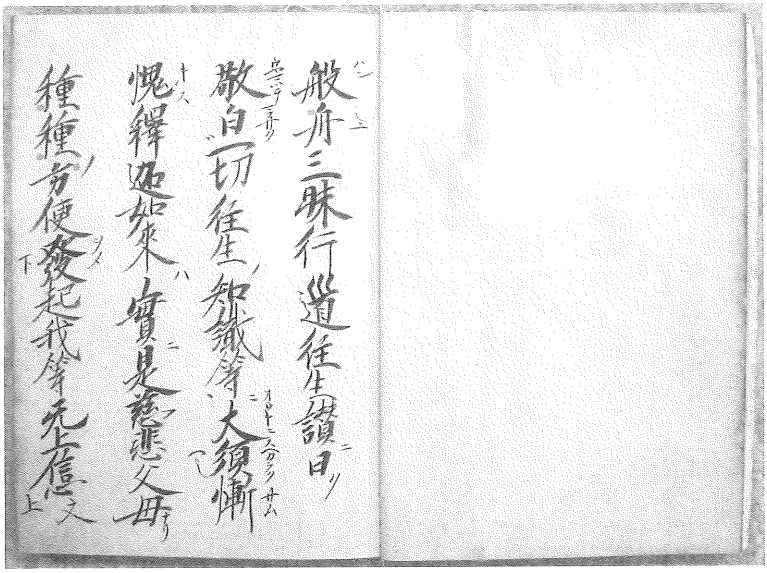
表紙



補紙 オ　　表紙見返



一オ　　補紙ウ



二オ　　一ウ

康元二歳丁巳二月晦夜
寅時夢告云

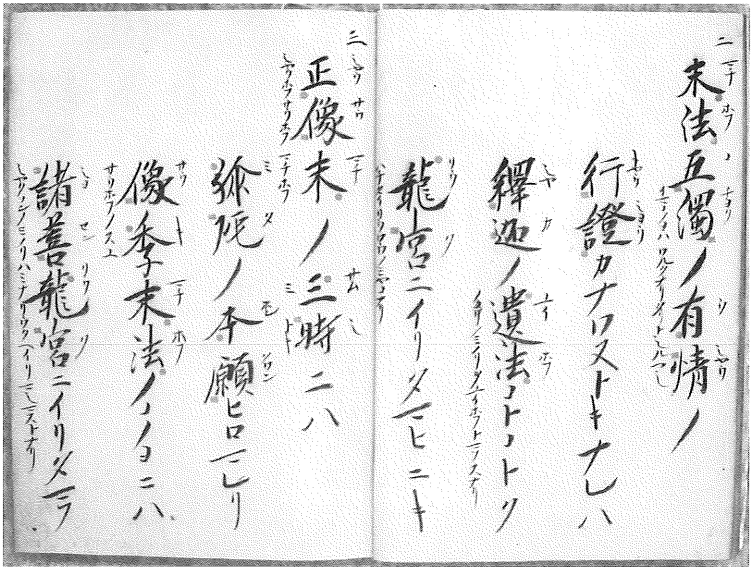
猶院ノ本願信スベシ
本願信スル人ハミナ
攝取不捨ノ利益ニテ
无上覺ヲハサドル也

三オ　二ウ

正像末法和讃

釋尊カリソメニシテ
二千餘年ニナリヌレバ
正像ノ二時ハオワリヌト
衆ノ遺法悲泣セヨ

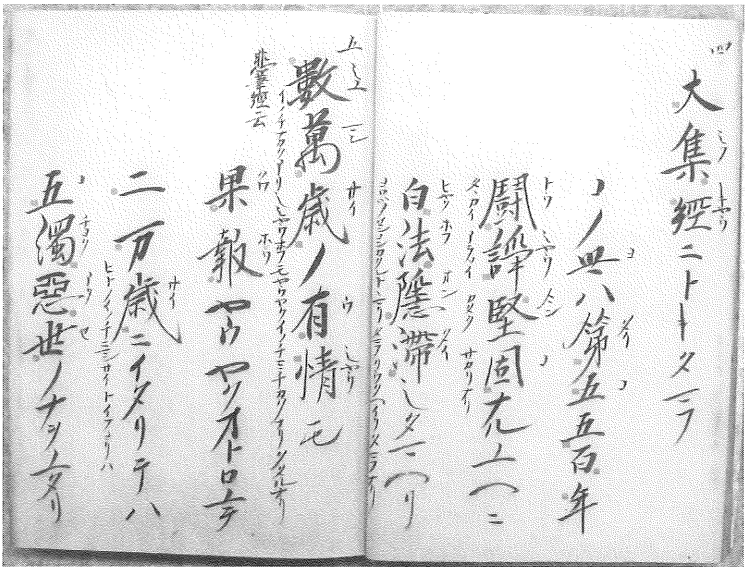
四オ　三ウ



末法五濁ノ有情ノ
行證カナフヌトキナレハ
釋迦ノ遺法ヲトトノトヽ
龍宮ニイリメヒニキ

正像末ノ三時ニハ
弥陀ノ本願ヒロヽヒ
像季末法ノ今ニハ
諸善龍宮ニイリメリ

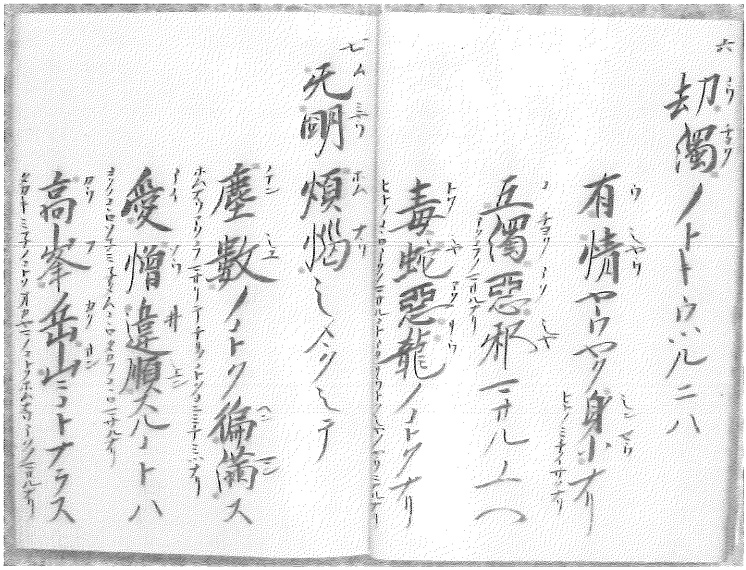
四ウ　五オ



大集經ニトトメヽリ
ノ世ハ第五五百年
鬪諍堅固ナルヽ
白法隱滅シメヽリ

數萬歲ノ有情
果報ヲウルトロヲ
二万歲ニイメリテハ
五濁惡世ノナヲヽメリ

五ウ　六オ

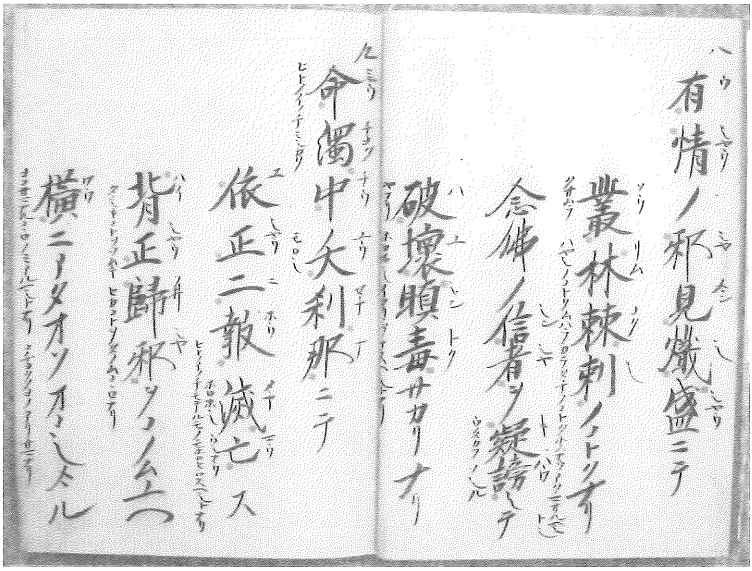


六ウ

劫濁ノトトヒ凡ニハ
有情トウヤウ身ニオリ
五濁惡邪ニテ凡人ハ
毒蛇惡龍ノトトクオリ

七オ

无明煩惱シ人クシテ
塵數ノトトク徧滿ス
愛憎違順人トハ
高峯岳山ニトナラス

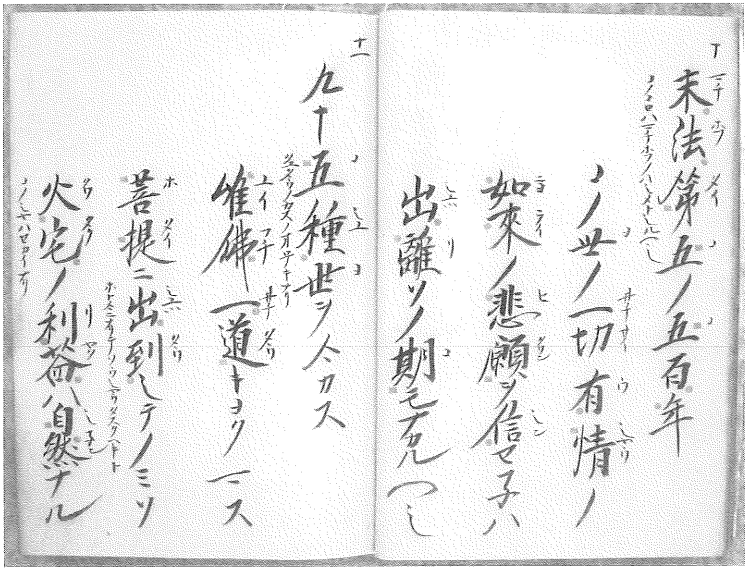


七ウ

有情ノ邪見儀盛ニテ
叢林棘刺ノトトクオリ
念佛ノ信者ノ疑謗ヘテ
破壞瞋毒サカリナリ

八オ

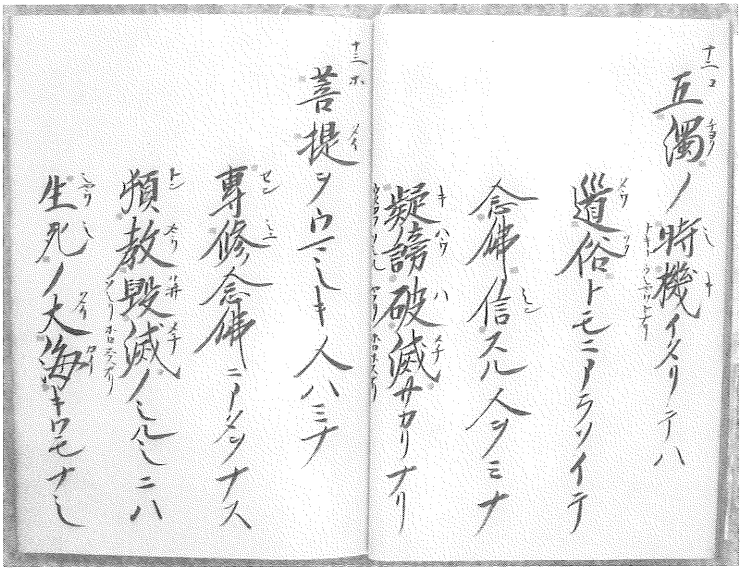
命濁中矢刹那ニテ
依正二報滅亡ス
背正歸邪ノ人ハ
横ニノタオツカ、ミスル



末法第五ノ五百年
ノヨノ一切有情ノ
如来ノ悲願ヲ信ズレハ
出離ノ期モ尤ヒシ

九十五種世ノ人カス
唯佛一道キヨクヒス
菩提ニ出到シテノミソ
火宅ノ利益自然ナル

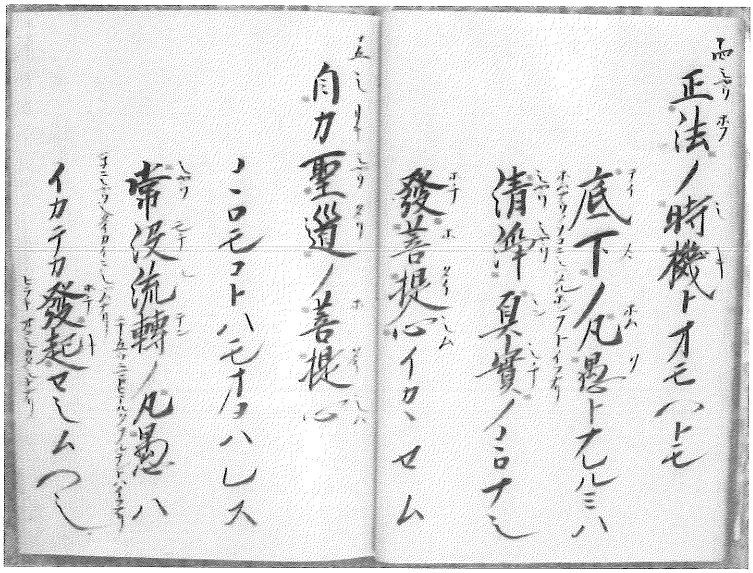
八ウ　九オ



五濁ノ時機イヤリテハ
遺俗トモニノラツイテ
念佛信スル人ヲミナ
疑謗破滅サカリナリ

菩提ヲ口ニシキ人ハミナ
専修念佛ニノメルナス
預教毀滅ノ人ニハ
生死ノ大海キワモナシ

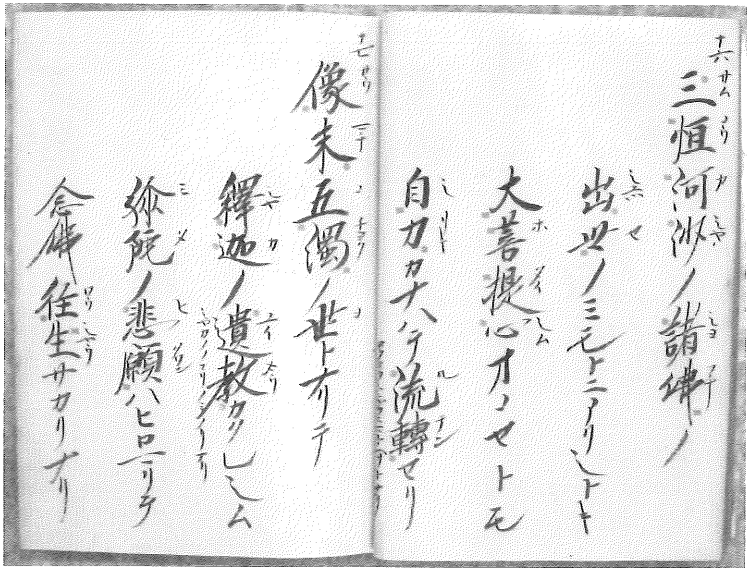
九ウ　十オ



正法ノ時機トオモヘトモ
底下ノ凡器トナルミハ
清淨真實ノ心ナシ
發菩提心イカヽセム

自力聖道ノ菩提心
ヽロモコトハモナヲハレス
常没流轉ノ凡愚ハ
イカテカ發起セシムヘシ

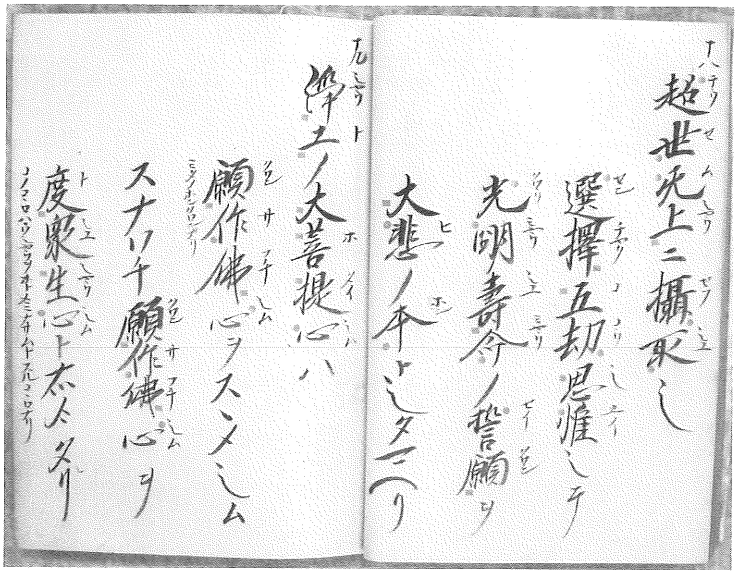
十ウ　十一オ



三恒河沙ノ諸佛ノ
出世ノミモトニアリシトキ
大菩提心オコセトモ
自力カナハテ流轉セリ

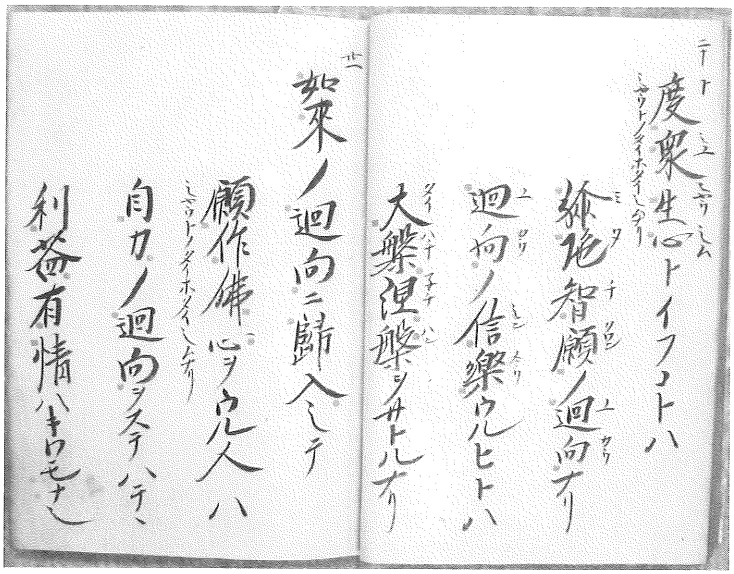
像末五濁ノ世トナリテ
釋迦ノ遺教カクレシム
彌陀ノ悲願ハヒロマリテ
念佛往生サカリナリ

十一ウ　十二オ



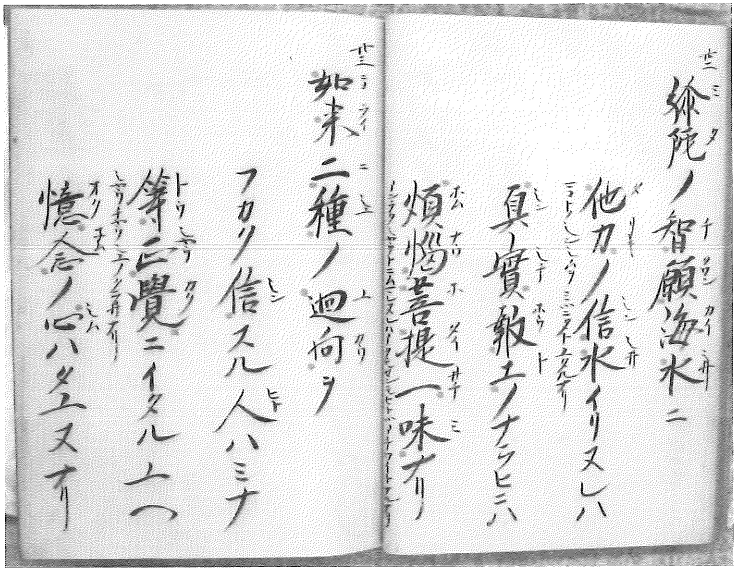
十二 ウ

十三 オ



十三 ウ

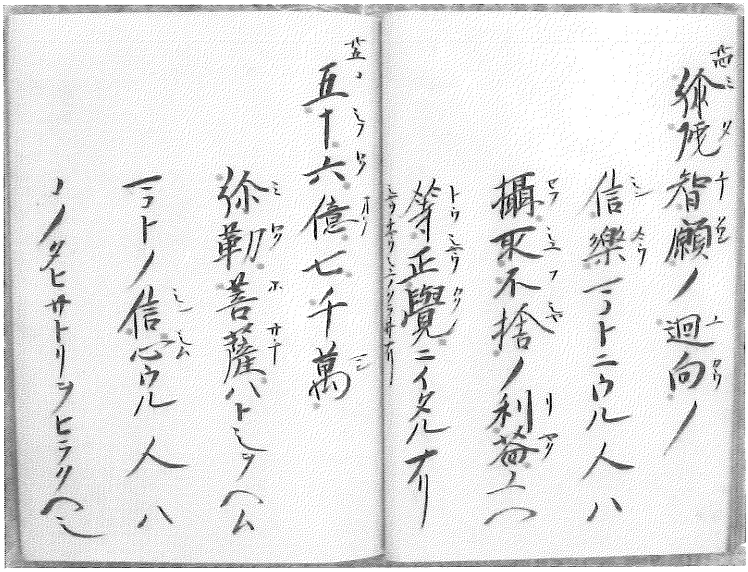
十四 オ



彌陀ノ智願海水ニ
他力ノ信水イリヌレハ
真實報土ノナツヒニハ
煩惱菩提一味ナリ

如來ニ種ノ廻向ヲ
フカノ信スル人ハミナ
等正覺ニイタル人ハ
憶念ノ心ハタエヌナリ

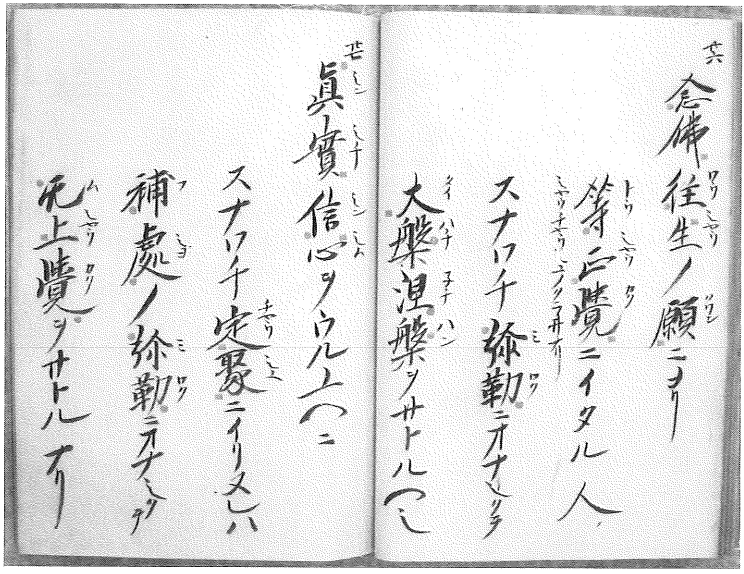
十四 ウ　　十五 オ



彌陀智願ノ廻向ノ
信樂一ツトニウル人ハ
攝取不捨ノ利益ニ
等正覺ニイタルナリ

五十六億七千萬
彌勒菩薩ハトヽノ
一ツトノ信心ウル人ハ
ノノタヒサトリヲヒラク

十五 ウ　　十六 オ

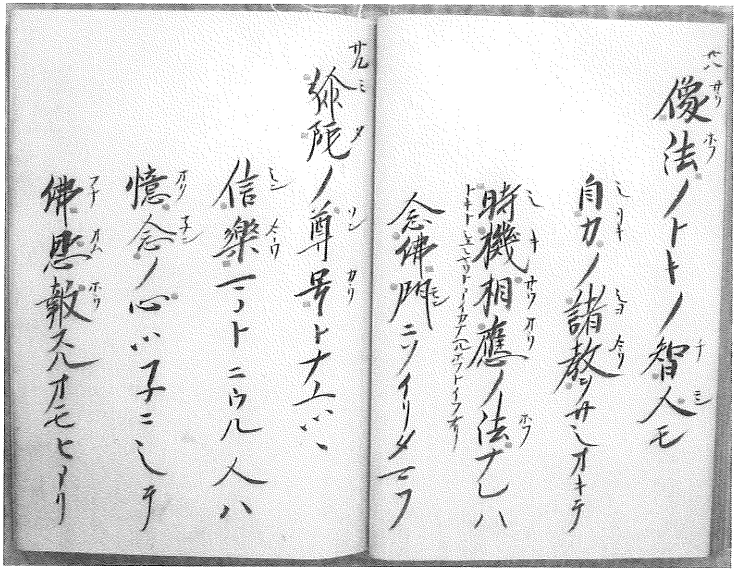


十六 ウ

念佛往生ノ願ニヨリ
等正覺ニイタル人
スナワチ彌勒ニオナジクラ
大樂涅槃ヲサトルベシ

十七 オ

眞實信心ヲウルヒトハ
スナワチ定聚ニイリメリ
補處ノ彌勒ニオナジクラ
无上覺ヲサトルナリ



十七 ウ

像法ノトキノ智人モ
自力ノ諸教ヲサシオキテ
時機相應ノ法ナレハ
念佛門ニゾイリメリ

十八 オ

彌陀ノ尊号トナヘツヽ
信樂一ツトニウル人ハ
憶念ノ心ツネニシテ
佛恩報スルヒトナリ

五濁惡世ノ有情ノ
選擇本願信スレハ
不可稱不可說不可思議ノ
功德ハ信者ノ身ニミテリ

十八 ウ

无量光佛ノミナトニハ
未來ノ有情利セムトテ
大勢至菩薩ニ
智慧ノ劍ヲ授ケシム

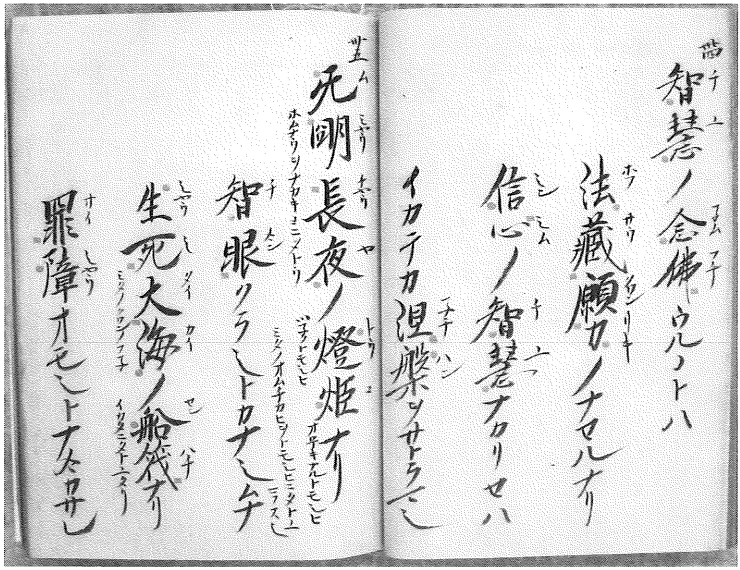
十九 オ

濁世ノ有情ヲアワレミテ
勢至念佛スヽメシム
信心ノ人ヲ攝取シテ
淨土ニ歸入セシメタリ

十九 ウ

彌陀釋迦ノ慈悲ヨリソ
願作佛心ハ ヒトシメタル
信心ノ智慧ニイリテコソ
佛恩報スルミトハナレ

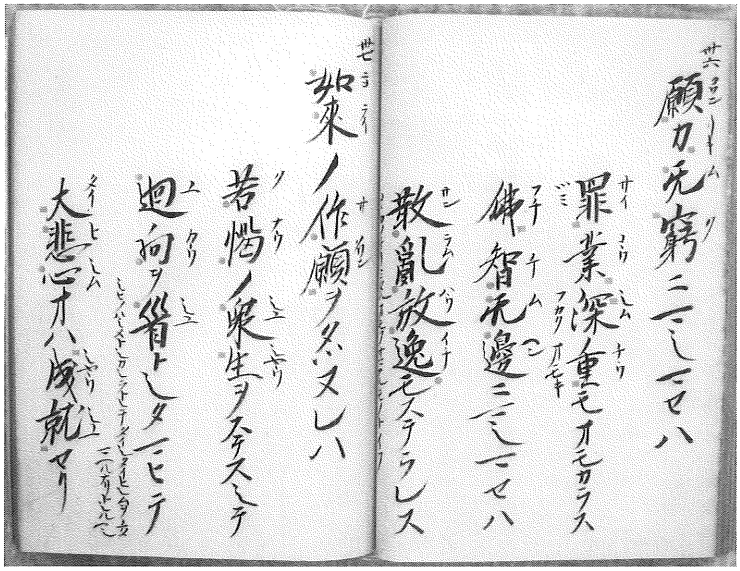
二十 オ



智慧ノ念佛ハ凡ノトハ
法藏願力ノナセルナリ
信心ノ智慧ナカリセハ
イカテカ涅槃ノサトラシム

无明長夜ノ燈炬ナリ
智眼クラシトカナシケ
生死大海ノ船筏ナリ
罪障オモシトナケキ

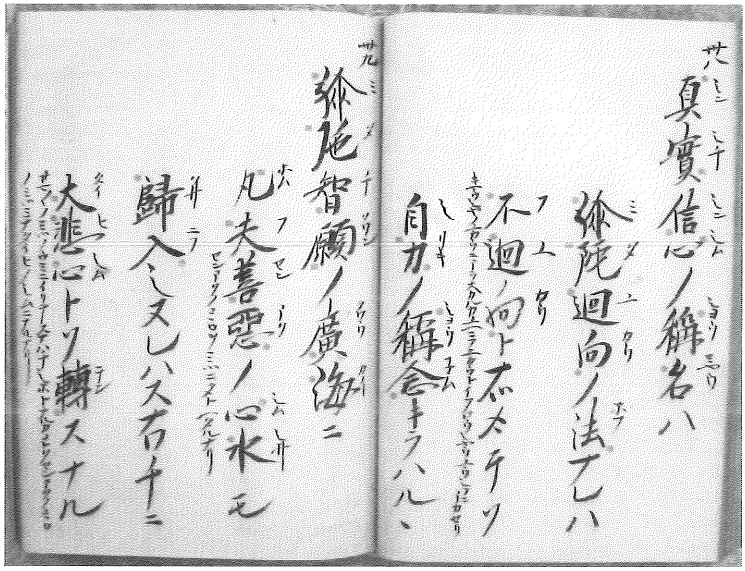
二十 ウ　二十一 オ



願力无窮ニシテセハ
罪業深重モオモカラス
佛智无邊ニシテセハ
敢亂放逸モステラレス

如來ノ作願ヲ思フレハ
苦惱ノ衆生ヲステスシテ
廻向ヲ首トシタマヒテ
大悲心ハ成就セリ

二十一 ウ　二十二 オ

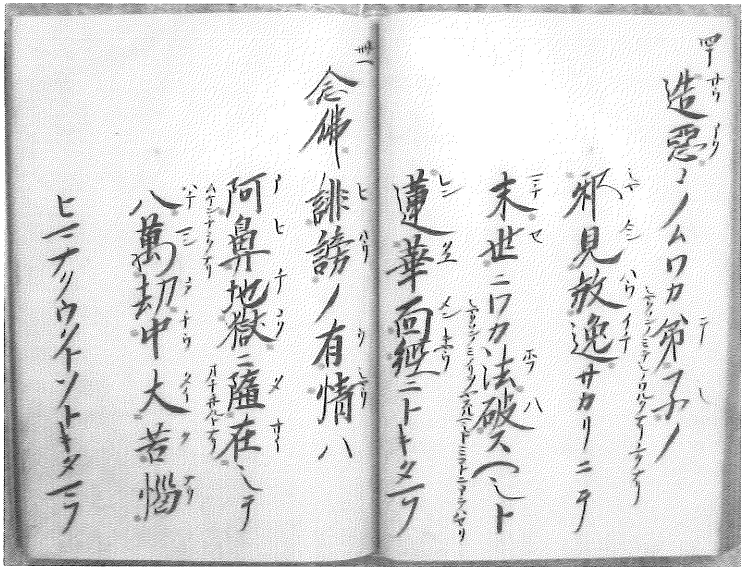


真實信心ノ稱名ハ
彌陀廻向ノ法ナレハ
不廻向ト不ムケテソ
自力ノ稱念キラハハヽ

彌陀智願ノ廣海ニ
凡夫善惡ノ心水モ
歸入スレハ又百千ニ
大悲心トソ轉スナル

二十二 ウ

二十三 オ

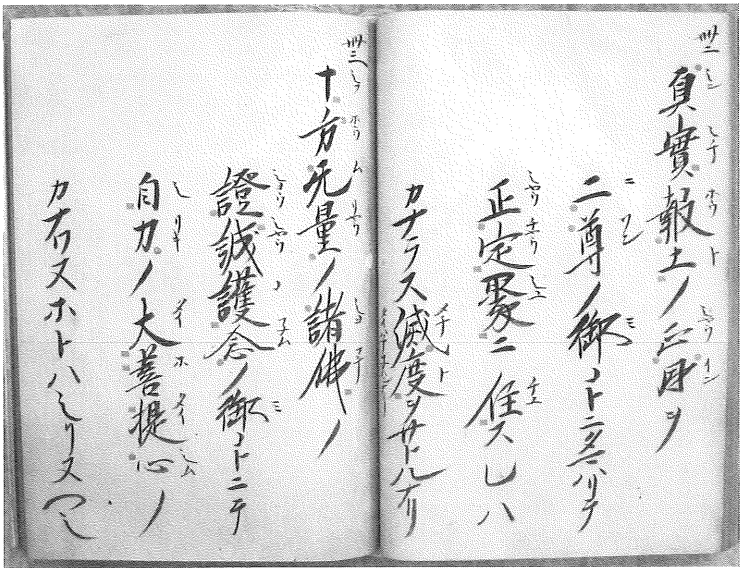


造惡ノムロカ弟子ノ
邪見放逸サカリニテ
末世ニロカ法破スヘシト
蓮華面經ニトキタリ

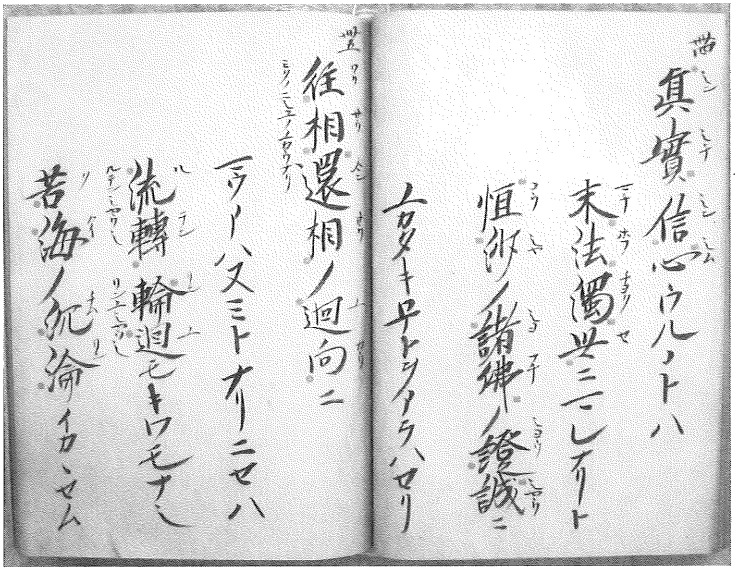
念佛誹謗ノ有情ハ
阿鼻地獄ニ墮在シテ
八萬劫中大苦惱
ヒニナリウケントトキタリ

二十三 ウ

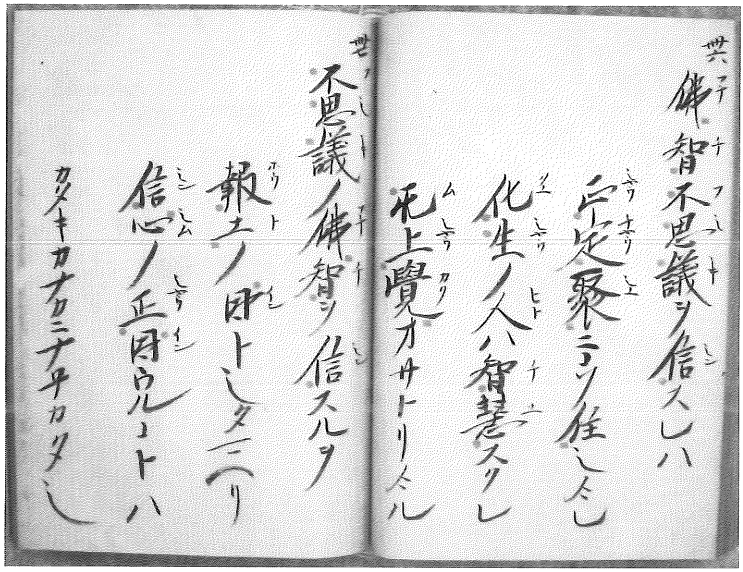
二十四 オ



二十四 ウ　　二十五 オ



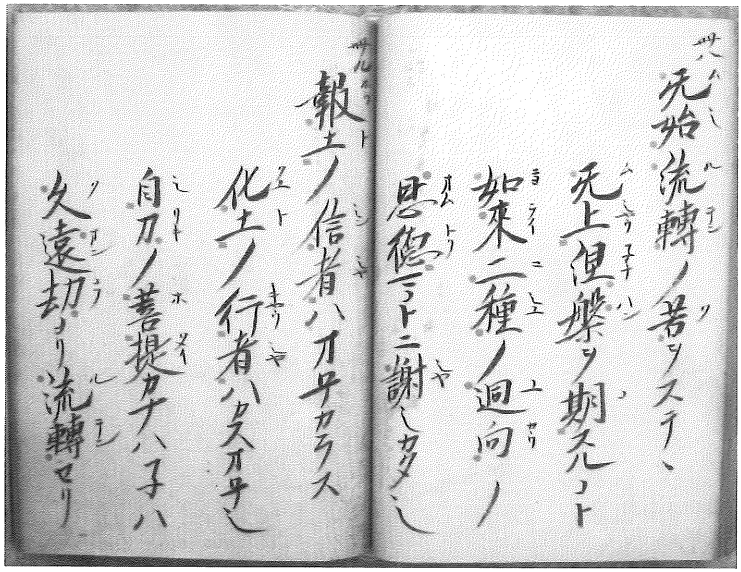
二十五 ウ　　二十六 オ



佛智不思議ノ信スレハ
定聚ニノ位ニ入レ
化生ノ人ハ智慧スクレ
无上覺オサトリ入ル

不思議ノ佛智ノ信スルノ
報土ノ因トシタマヘリ
信心ノ正因ウルコトハ
カヘリカヘリナヲカヘシ

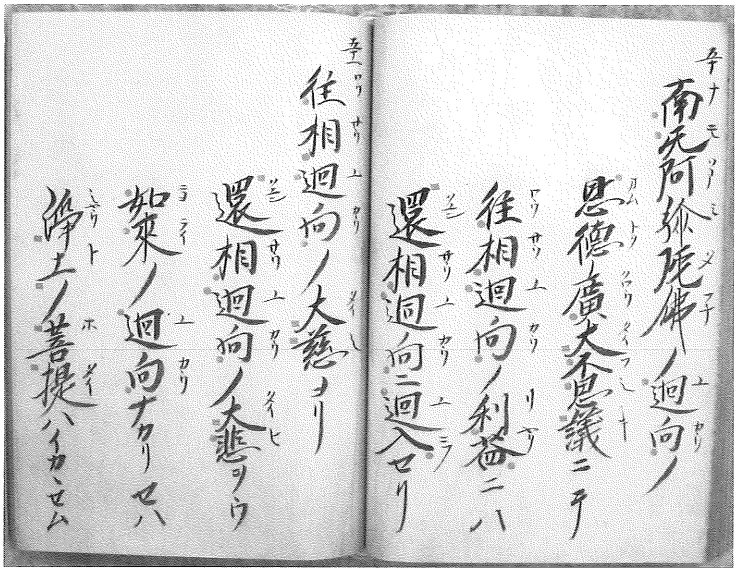
二十六 ウ　二十七 オ



无始流轉ノ苦ヲステ、
无上涅槃ノ樂スルコト
如來二種ノ廻向ノ
恩德ニトヒ謝シカヘシ

報土ノ信者ハオナカラス
化土ノ行者ハスナヲシ
自力ノ菩提カナハヌハ
久遠劫ヨリ流轉セリ

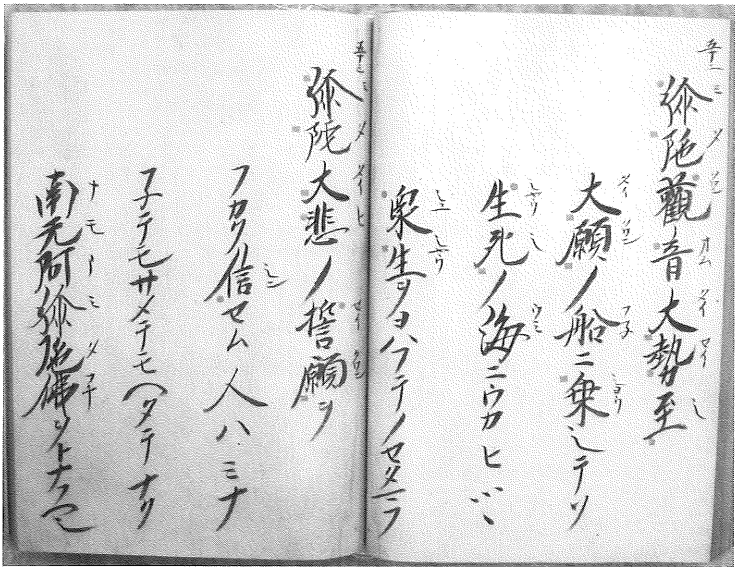
二十七 ウ　二十八 オ



南无阿弥陀佛ノ廻向ノ
恩德廣大不思議ニテ
往相廻向ノ利益ニハ
還相廻向ニ廻入セリ

往相廻向ノ大慈ヨリ
還相廻向ノ大悲ヨウ
如來ノ廻向ナカリセハ
淨土ノ菩提ハイカヽセム

二十八 ウ　　二十九 オ



弥陀觀音大勢至
大願ノ船ニ乘テソ
生死ノ海ニウカヒヽ
衆生ヲワタテノセメテフ

弥陀大悲ノ誓願ヲ
フカク信セム人ハミナ
ヲナテヒサメテヒ(タテナリ
南无阿弥陀佛ヲトナヘヒ

三十 オ　　二十九 ウ

聖道門ノ人ハ三ナ
自力ノ心ヲ本トセリ
他力不思議ニイリヌレハ
義モキヱ義ヲ信セリ

三十 ウ

釋迦ノ遺法ニシテセト
修スヘキ有情ノキハニ
オトリ凡モノ末法ニ
一人モノラシトトメテフ

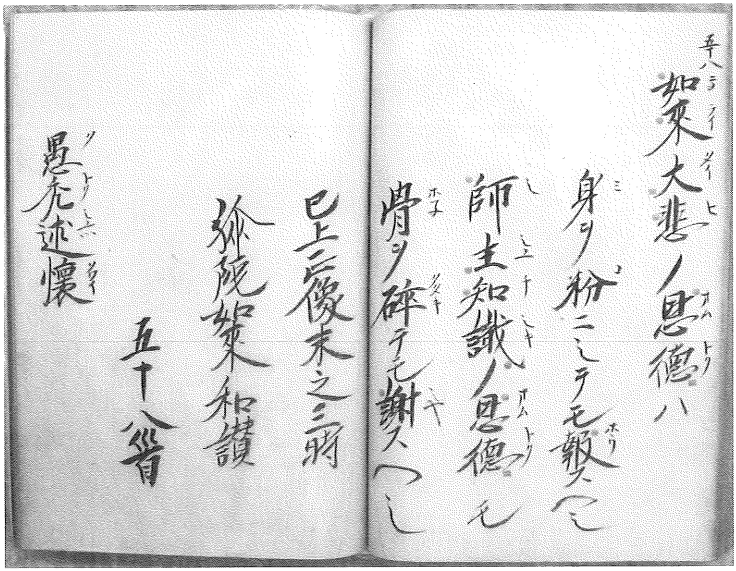
三十一 オ

三朝淨土ノ大師等
哀愍攝受シメテヒテ
真實信心スヽメシメ
定聚ノ位ニイレシメ

三十一 ウ

他力ノ信心凡人ハ
ウヤヲヒオロキニヨロフメハ
スナワチ是親友ソト
教主世尊ホメタマフ

三十二 オ

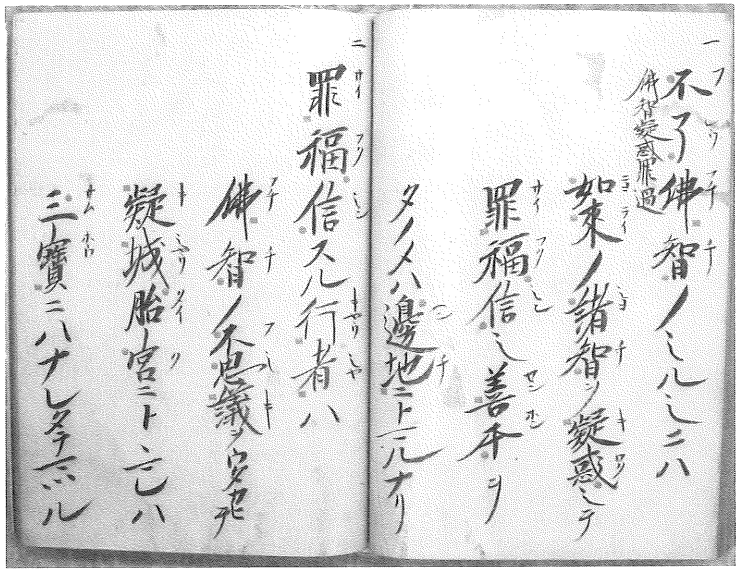


如來大悲ノ恩德ハ
身ヲ粉ニシテモ報スヘシ
師主知識ノ恩德モ
骨ヲ碎テモ謝スヘシ

三十二 ウ

已上後末之三帖
弥陀如來和讃
五十八首
愚禿述懷

三十三 オ

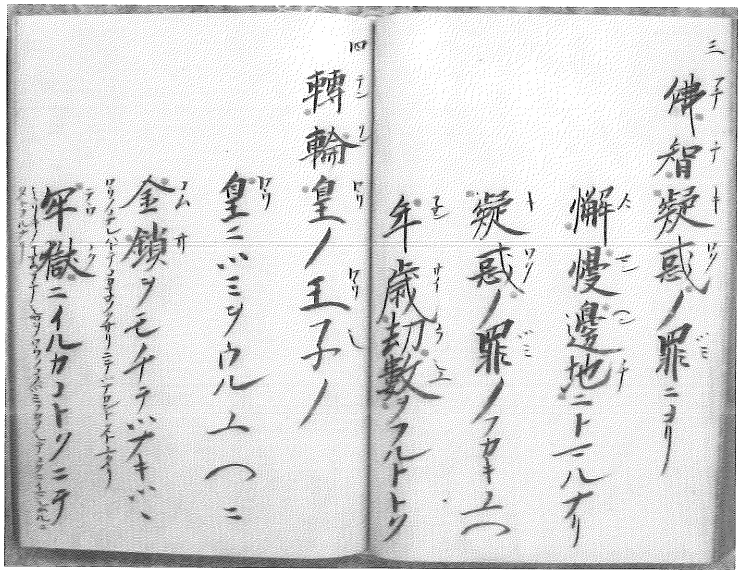


不了佛智ノ心ニハ
如來ノ諸智ノ疑惑シテ
罪福信ニ善本ヲ
タノメハ邊地ニトヽマリ

三十三 ウ

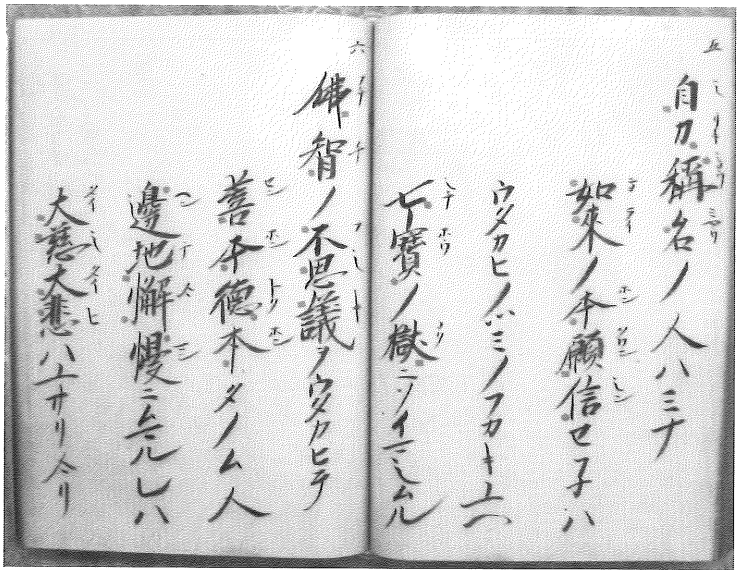
罪福信ス心行者ハ
佛智ノ不思議ヲ疑惑
疑城胎宮ニトヽマリテ
三寶ニハナレタテマツル

三十四 オ



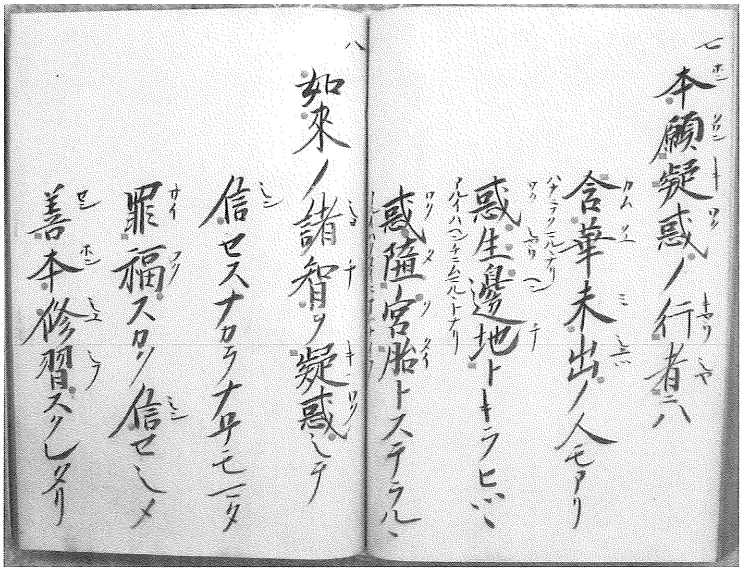
三十四 ウ

三十五 オ

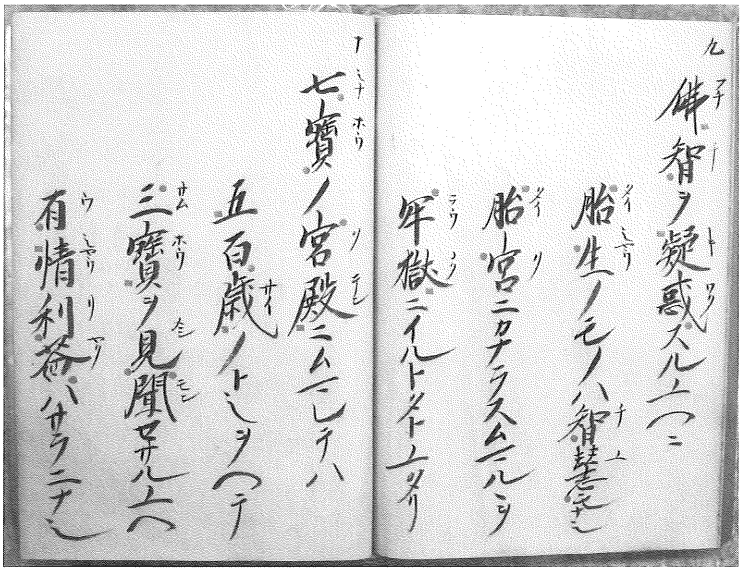


三十五 ウ

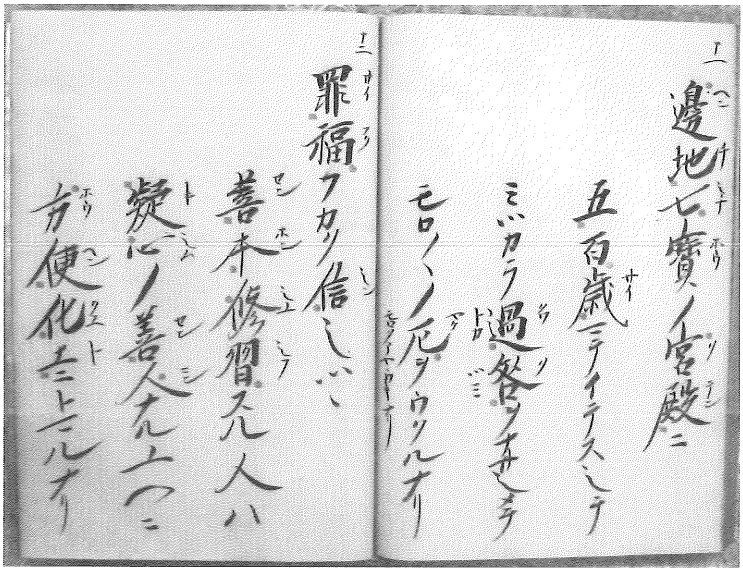
三十六 オ



三十六 ウ　三十七 オ



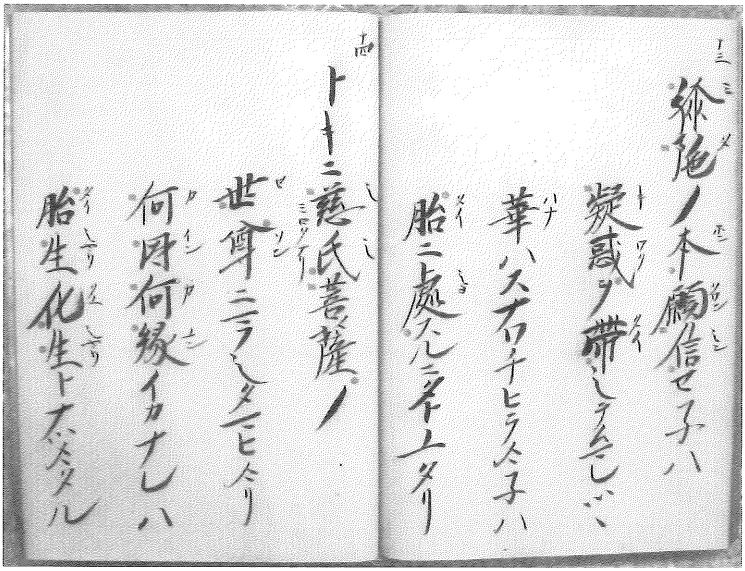
三十七 ウ　三十八 オ



邊地七寶ノ宮殿ニ
五百歳ニテイテスシテ
ミカラ過咎ノ苦シテ
ヒロノ厄タウツルオリ

罪福フカリ信シ
善本修習スル人ハ
疑心ノ善人九上ニ
方便化ニトニルオリ

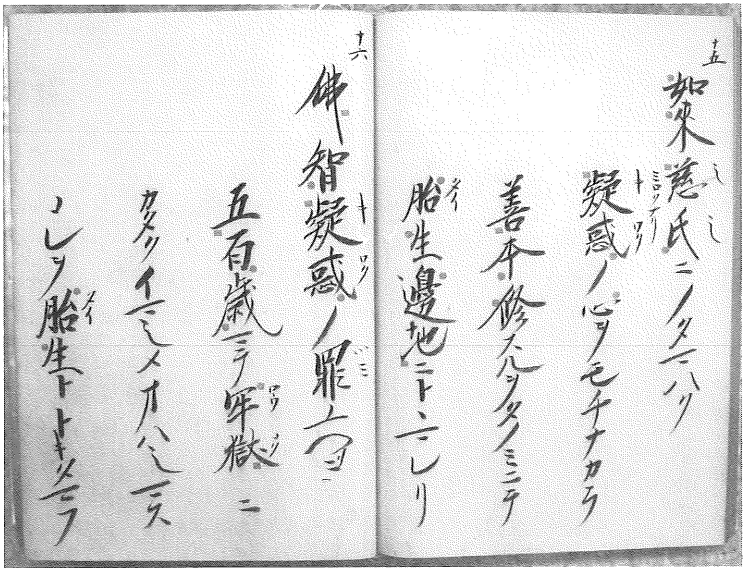
三十八 ウ　三十九 オ



弥陀ノ本願信セ子ハ
疑惑ノ帯シテムシバ
華ハスカナヒラ人子ハ
胎ニ處スルニ年上タリ

トキニ慈氏菩薩ノ
世尊ニマシメヒ人リ
何因何縁イカナシハ
胎生化生トナ人タル

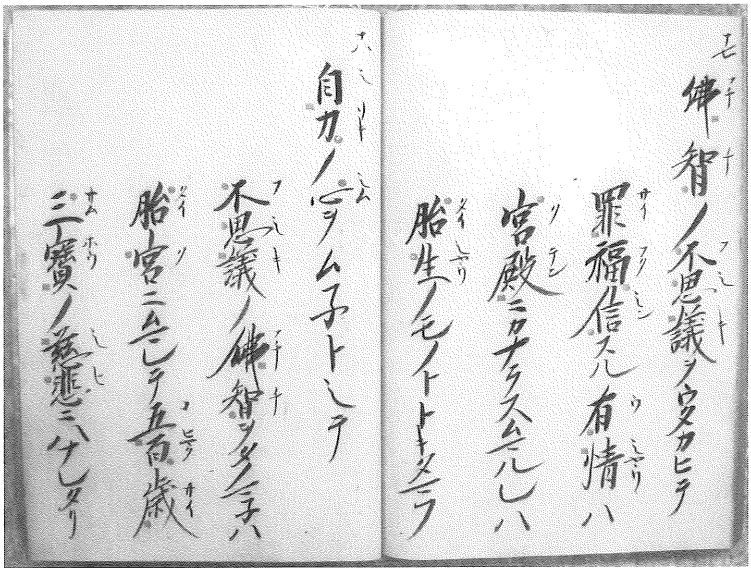
三十九 ウ　四十 オ



如來慈氏ニノタマヘハリ
疑惑ノ心ヲモチナカラ
善本修スルタノミニテ
胎生邊地ニトヽマレリ

佛智疑惑ノ罪ヨリテ
五百歳ヲ牢獄ニ
カヲクイマシメラレハヽ
ソレノ胎生トトキヽテ

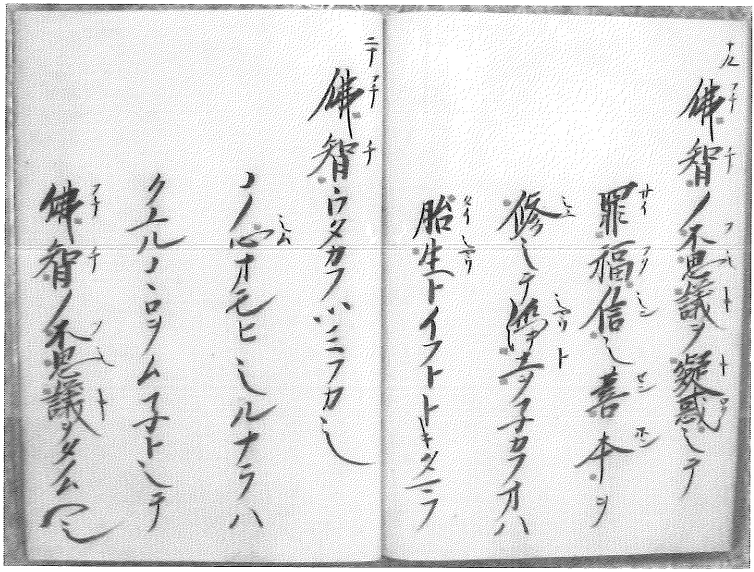
四十 ウ　四十一 オ



佛智ノ不思議ヲウタカヒテ
罪福信スル有情ハ
宮殿ニナラスムヘシハ
胎生ノモノトトキヽテ

自力ノ心ヲムヲトシテ
不思議ノ佛智ヲタノマスハ
胎宮ニムヘシテ五百歳
三寶ノ慈悲ニハヘナリ

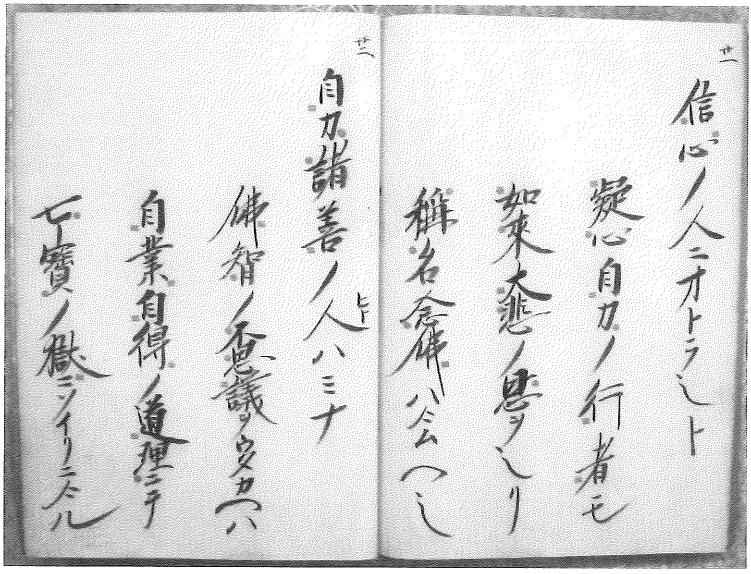
四十一 ウ　四十二 オ



佛智ノ不思議ヲ疑惑シテ
罪福信シ善本ヲ
修シテ往生ヲ願フハ
胎生トイフトトキノミナ

佛智ヲタノマスシテカシ
ノ心オモヒシルナラハ
クルヽヨロムヲトシテ
佛智ノ不思議ヲタノム

四十二 ウ　四十三 オ



信心ノ人ニオトラシト
疑心自力ノ行者モ
如來大悲ノ願ヲシリ
稱名念佛ハタノム

自力諸善ノ人ハミナ
佛智ノ不思議ヲタノマ
自業自得ノ道理ニテ
化宅ノ獄ニイリニケル

四十三 ウ　四十四 オ

已上疑惑罪過二十二首

佛智ウタガフミトカクアキラノトウ
ノラハリノヒヌヘシナヘシンタイシテリ
ナント、イフカ

愚禿親鸞作

愚禿悲歎述懷

一

弥陀真宗ニ歸スレトモ
真實ノ心ハ一リカタシ
虛假不實ノ人ミテ
清淨ノ心モサラニナシ

四十四 ウ

四十五 オ

二

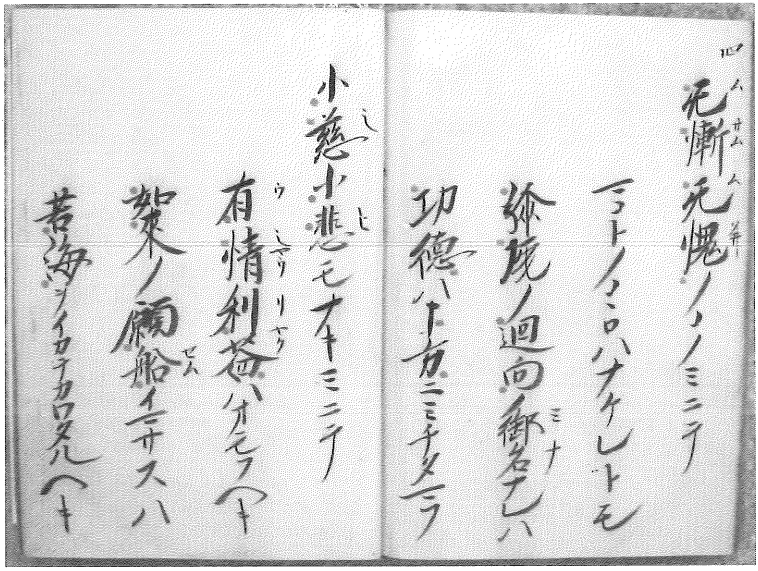
外儀ノスカタハヒトノトニ
賢善精進ヲ現セシム
貪瞋邪偽ヲ内ニ
奸詐モハ身ニミテリ

三

惡性サラニヤメカタシ
ノコハ蛇蝎ノトクナリ
修善モ雜毒ナ上ニ
虛假ノ行トナツケタリ

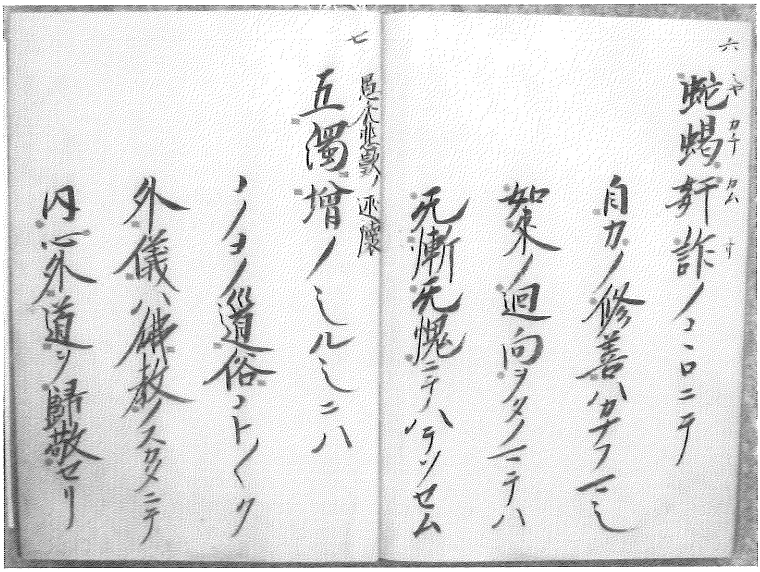
四十五 ウ

四十六 オ



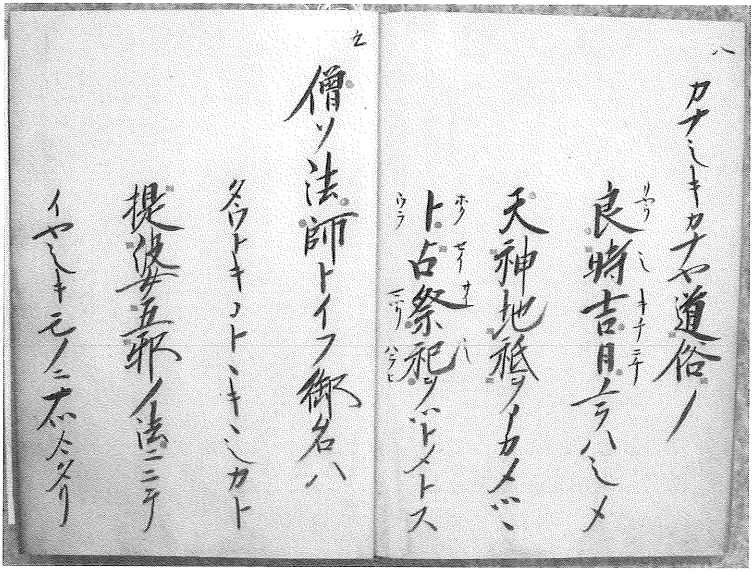
四十六 ウ

四十七 オ



四十七 ウ

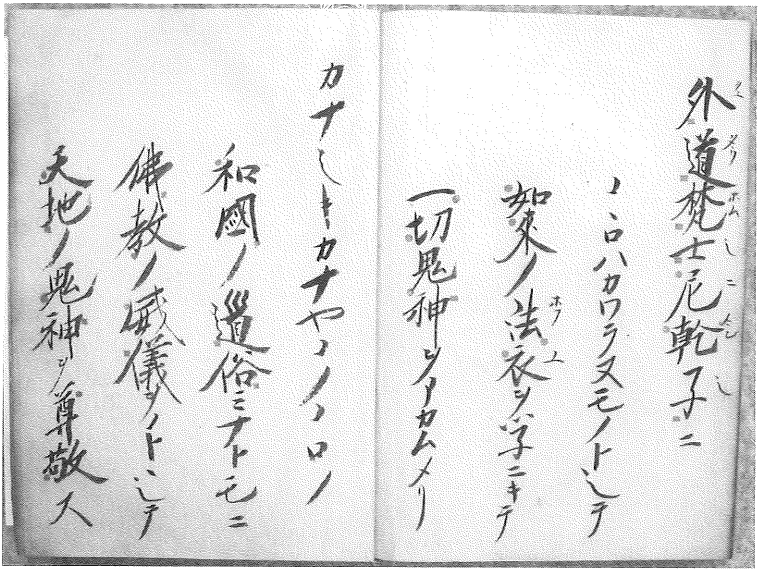
四十八 オ



カナしきカナやの道俗ノ
良時吉日ヲハしメ
天神地祇ノカメゾ
ト占祭祀ノハトメトス

僧ソ法師トイフ御名ハ
名ウトキコトヽキヽカト
提婆五郎ノ法ニテ
イヤしキモノニ太ケリ

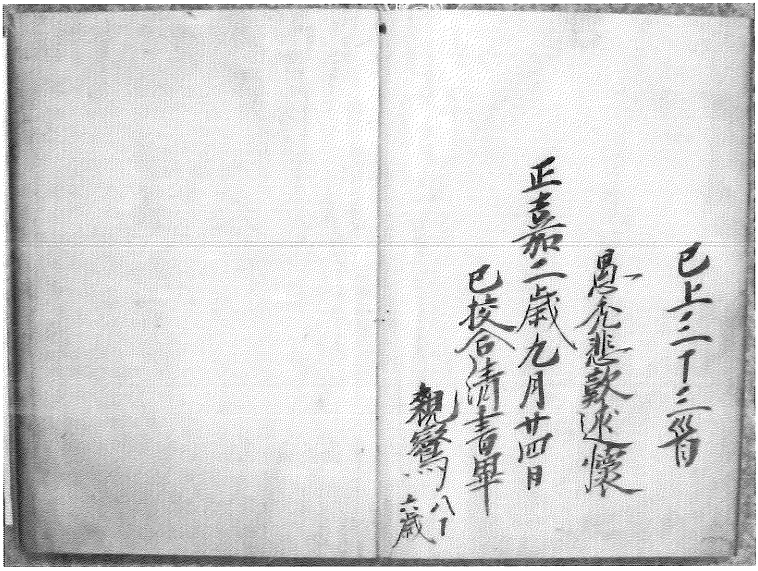
四十八 ウ　　四十九 オ



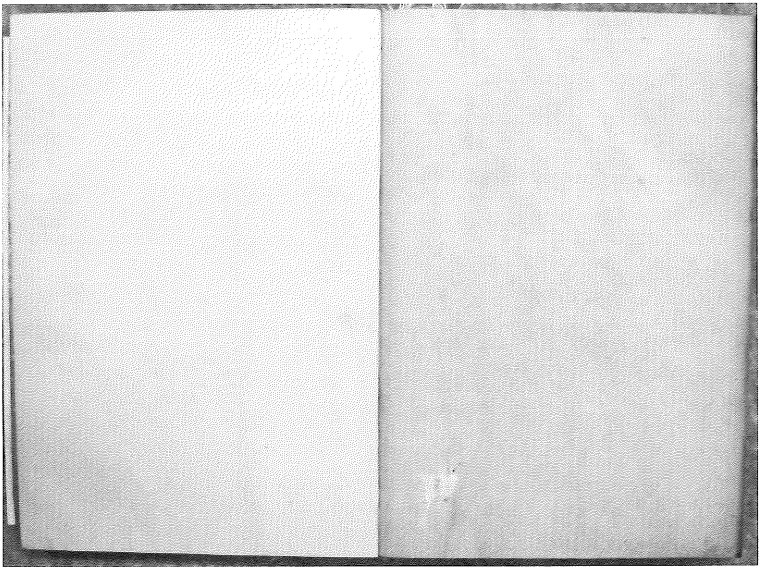
外道梵士尼乾子ニ
ノロハカワラヌモノトしテ
袈ノ法衣ヲ学ニキテ
一切鬼神ノカムメリ

カナしきカナやノノロノ
和國ノ道俗ミナトモニ
佛教ノ威儀ノトしテ
天地ノ鬼神ノ尊敬ス

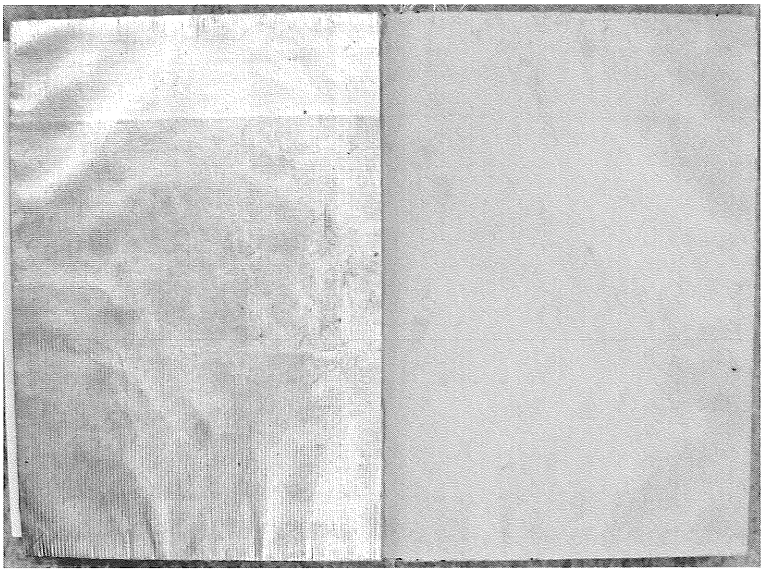
四十九 ウ　　五十 オ



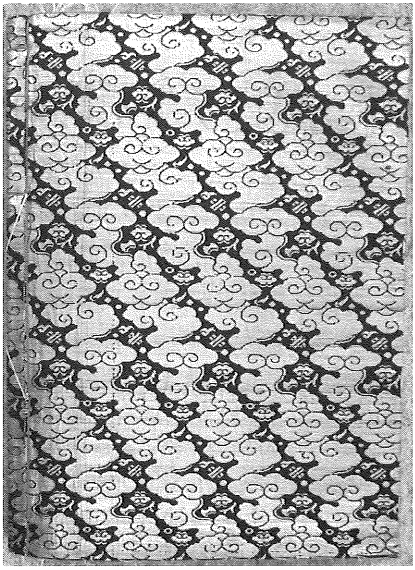
五十一 オ　　五十 ウ



補紙 オ　　五十一 ウ



裏表紙見返　　補紙 ウ



裏表紙